

表10 大庭寺遺跡密集型土坑群一覧表（55）

面積の+は残存値、（ ）は推定値

土坑No	W×L	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	面積 (m <sup>2</sup> )	埋土	出土遺物	時期
3045 7C	1.3	0.9	0.23	1.0	10YR6/1黄褐色シト質粘土(10YR6/6明黄褐色粘土含む)	砂透籠片1点。	?	
3047 7C	0.6	0.4	0.10	0.1	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3048 7C	0.9	0.6	0.14	0.3	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(10YR6/6明黄褐色粘土含む)			
3049 7C	1.2+	1.0	0.22	0.9+(1.0)	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)	II-? 錠蓋1点。	II-?	
3050 7C	1.1	0.7	0.20	0.7	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)	土封留窓口縁片1点	?	
3051 7C	1.2	0.7	0.24	0.7	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(中・近世)			
3052 7C	2.1+	0.9+	0.07	1.4+	10YR6/1黄褐色シト質粘土(10YR6/6明黄褐色粘土含む)			
3053 7C	1.5+	0.5+	0.09	0.5+	10YR6/1黄褐色シト質粘土(10YR6/6明黄褐色粘土含む)			
3054 7C	1.4	0.9	0.13	0.9	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土			
					2.5Y6/4黄褐色シト質粘土、2.5Y6/1黄褐色シト質粘土	II-? 錠身受器1点(1/4周)、II-3~IV-1合付広口壺1/2分1点。平底瓶1/3分1点。		
3055 7C	1.4	1.0	0.15	0.9	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土			
3056 7C	0.8+	0.7	0.03	0.4+(0.5)	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土			
3057 7C	1.3+	0.7+	0.04	0.7+	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3058 7C	0.9	0.6	0.05	0.4	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土			
3059 7C					2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3060 7C	0.6	0.4	0.20	0.1	10YR6/1黄褐色シト質粘土(10YR6/6明黄褐色粘土含む)			
3061 7C	不明	不明	0.17	不明	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3062 7C	0.6	0.6	0.20	0.3	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3063 7C	不明	不明	?	不明	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3064 7C	不明	不明	?	不明	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3065 7C	不明	不明	?	不明	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3066 7C	不明	不明	?	不明	2.5Y6/1黄褐色シト質粘土(2.5Y6/6明黄褐色シト質粘土含む)			
3067 7C	0.8	0.6	0.05	0.4				
3068 5C	不明	不明	?	不明	2.5Y6/1黄褐色砂質土(炭化物多く含む)			
3069 5C	不明	不明	?	不明	2.5Y6/1黄褐色砂質土			
3070 5C	不明	不明	?	不明	2.5Y7/1灰白色砂質土(炭化物含む)	II-? 罐or杯縁片1点(外因)。杯縁細片1点(口縁欠)。	II-?	
3071 5C	不明	不明	?	不明	2.5Y7/1灰白色砂質土			
3072 8C	1.3+	0.7+	0.14	0.8+				

## 第4章 伏尾遺跡の遺構および遺物

### 第1節 遺構および遺物の概要と基本層序

本遺跡は1988年より協会がA地区、B地区の調査を行い、当センターは通称侍池谷を挟んだ南側のみかん畑になっていた丘陵部分（D地区）と橋脚部（E地区）、更に本線を潜るボックス部分（A・C地区）の調査を行った。A地区は協会が行った調査区の南東に隣接し、鋼矢板を打設して調査を行った。なおC地区的調査は17mもの産業廃棄物の盛土を除去するのに時間がかかり、ボックス部分の建設工事の関係から調査区をさらに3分割にして調査を行い、3Cトレンチは1992年度に行う事となった。AトレンチおよびCトレンチは伏尾丘陵内に走る谷筋に位置する（図139）。

#### 1. A地区 1A・2Aトレンチ（図140）

1A・2Aトレンチは協会担当調査区B地区-A区の南東側に隣接して位置する。地形的には石津川右岸の小代古墳群が立地する伏尾丘陵と、埴輪を伴った方形墳が所在する協会調査区A地区的丘陵の間に位置し、前葉和子氏の地形分類では氾濫原、高橋学氏の分類では完新世段丘面の自然堤防帯に当たる字名に「角ノ内」、「小川」、「コロゲツ」、「ハイ上ガリ」の地名が残されている所である。

1A・2Aトレンチでは人力掘削約1.6m掘り下げた時点で、縄文・弥生時代から古墳時代の遺物を含む河川が検出された。1Aトレンチ南西端から2Aトレンチにかけては足跡が確認された。また、その下層では複数の河川が存在している。Aトレンチでは5~6枚の黒色粘土を検出しておらず、T.P.+18.6~18.8mに位置する黒色粘土は花粉分析により縄文時代早期頃に相当すると報告されている。協会のA区と隣接しているが、調査結果をみると様相の異なることが判明した。

1Aトレンチは、北側と南側では層序が全く異なる。中・近世の層序はほぼ同じであるが、北側では河川1が形成される黒色粘土以下の層序と、南側の古墳時代河川3が形成される青灰色粘土以下の層序は異なる。3条の古墳時代河川の下に更に、それよりも以前の河川が埋没しているからである。ここでは北側の層序を記述しておく。

- ①産業廃棄物投棄土：現代の盛土。層厚5.5m以上。T.P.+27.3~21.5m。
- ②黄褐色シルト：現・近代~近世盛土。層厚0.5~1m。T.P.+21.5~20.7m。
- ③青灰色シルト：近世~中世。層厚25~30cm。T.P.+20.5~20.9m。
- ④青灰色砂質土：中世。瓦器出土。層厚24~60cm。T.P.+19.96~20.6m。
- ④'砂疊・砂質土：上層の河川もしくは洪水砂層。層厚67cm。T.P.+20.56~21.37m。
- ⑤黒色粘土：炭化物を含む。第1黒色粘土。層厚15cm。T.P.+20.51~20.72m。
- ⑥灰色シルト質粘土：植物遺体を含む。層厚24cm。T.P.+20.08~20.6m。
- ⑦暗灰色粘土：植物遺体を含む。下位に細砂堆積。足跡・畦畔？。第2黒色粘土。層厚14~38cm。T.P.+19.83~20.44m。
- ⑧オリーブ灰色粘土：層厚3~12cm。T.P.+19.9~20.18m。
- ⑨オリーブ黑色粘質土：黄灰色砂含む。第3黒色粘土。層厚4~30cm。T.P.+19.77~20.1m。本層の上面で3条の河川を検出。須恵器出土。
- ⑩灰色シルト：緑灰色シルトを含む。上位に灰白色砂混じる。層厚8~65cm。T.P.+19.38~20.02m。

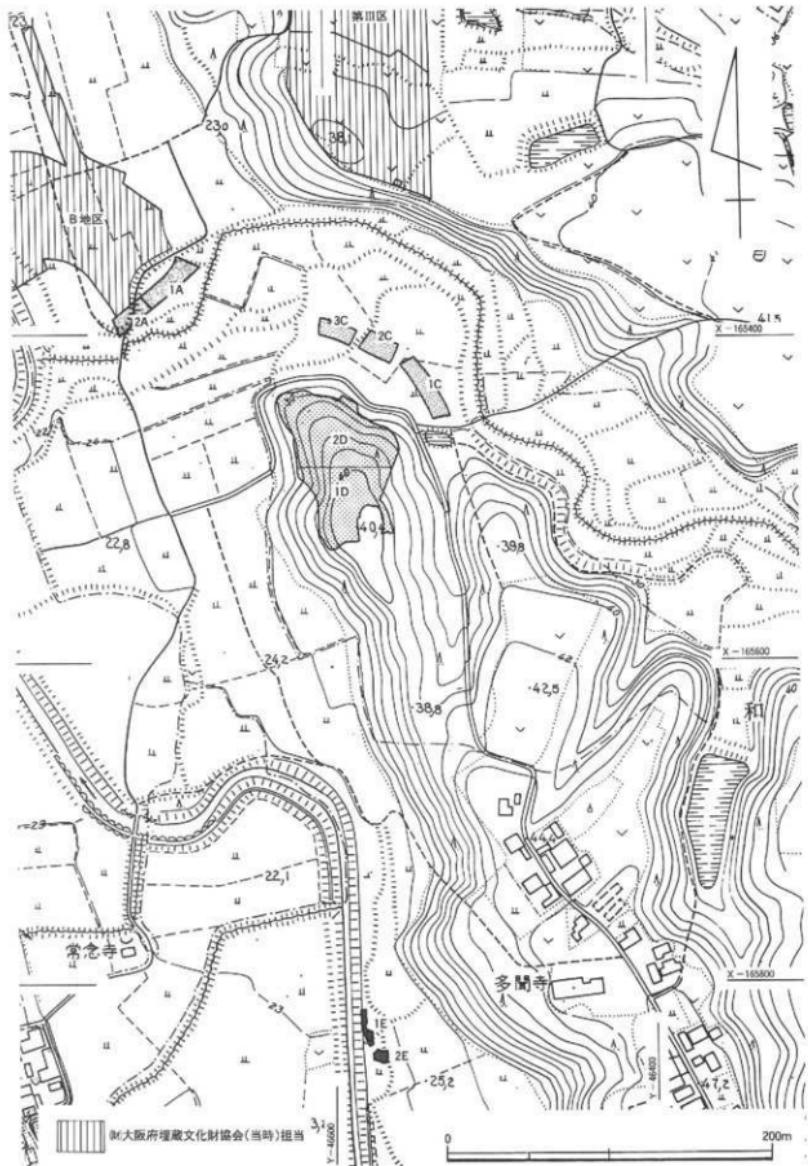


図139 伏尾遺跡トレンチ配置図

- ⑪ 黒色粘土：植物遺体を含む。第4 黒色粘土。層厚19~35cm。T.P.+19.21~19.72m。  
 ⑫ 緑灰色シルト：炭化物を含む。層厚 6~21cm。T.P.+19.1~19.4m。  
 ⑬ 黒色粘土：第5 黒色粘土。層厚 3~18cm。T.P.+18.99~19.2m  
 ⑭ 緑灰色シルト：炭化物を含む。層厚 6~21cm。T.P.+18.88~19.15m。  
 ⑮ オリーブ黒色シルト質粘土：シルト帯状に含む。層厚45~54cm。T.P.+18.44~19m。  
 ⑯ 灰色砂礫：層厚90cm以上。T.P.+17.54~18.4m。

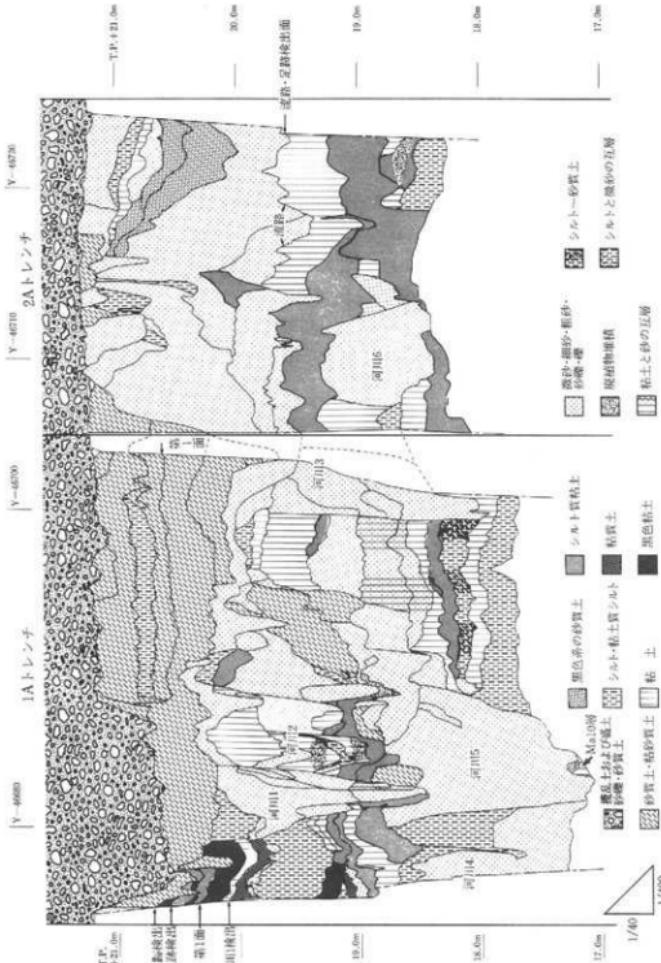


図140 1A・2A トレンチ層序概略図

⑪青灰色粘土：T.P.+17.26mから以下。  
④層は瓦器の破片が出土しているので室町時代である。⑨層は3条の河川より須恵器が多く出土しており、古墳時代中期から後期である。⑨層以下は古墳時代以前であるが、⑩層が土壤分析の結果Ma10層相当層、またはMa10層を含む大阪層群のHaploxlon帯に相当と報告されており、⑨～⑩層は縄紋時代早期以降、⑪～⑫層は縄紋時代早期頃の堆積の可能性を報告されている。2A地区は1A地区と同様にT.P.+27～22.7mに産業廃棄物投棄土が堆積し、その下層のT.P.+22.7～21.3mに現代から現・近代～近世盛土が堆積する。1A地区の古墳時代河川3が形成される青灰色粘土層は、2A地区では暗灰色シルト質粘土層になり足跡と流路を検出している。本層は植物遺体を含む堆積層で、上面では鉄分が沈着している。本層以下の層序は、1A地区の北半部と同様に砂礫層が1m以上も堆積しており、古墳時代以前の埋没河川を確認出来た。遺物は擾乱層より縄紋土器片が出土し、河川からは石皿と思われる石器が出土している。

## 2. B地区

B地区は協会担当調査区の南側に接して位置する。破壊が著しく調査の対象面は無かった。

## 3. C地区 1C・2Cトレンチ（図141～143）

1Cトレンチは、3Cトレンチの南東に隣接し、また3基の古墳が存在するD地区の北側、即ち丘陵の下に位置する。この丘陵と協会担当調査区の丘陵との間の、ちょうど谷部に位置し、C地区はその開口部に当たる。調査区に係る字名は「池之内」である。

遺構面は2面確認し、遺構としては中・近世の鋤溝群と畦畔、弥生時代中期の2条の流路と石器を含む土器集積を確認した。

1Cトレンチは、旧地表面の上には約17mもの産業廃棄物が盛土されており、機械掘削にて除去するのに多大な時間を要した。旧表土・旧耕作土・床土を人力にて掘削した後、約30cm下層にて近世から中世にかけての鋤溝群と畦畔を確認した。この面を第1面とし、旧表土・旧耕作土から第1面までは黄灰色系の砂質土が堆積している。第1面は明黄褐色の粘土をベースとしている。

第1面の下層では、約1mの掘削で弥生時代の土器と石器が散布する面を検出した。またこの面では縄紋から弥生時代の遺物を含む河川も確認している。この面を第2面とし、緑灰色シルト（調査時では「青灰色シルト」と呼称）をベースとしている。1面から2面までの層序で3枚の黒色粘土層があり、C調査区の基準層と考えられる。

1Cトレンチの基本層序は、確認した遺構面までの層は、大きく9層に分ける事ができる。上層より

- ①現代擾乱土
- ②灰黄色砂質土
- ③明黄褐色粘土
- ④黄灰色粗砂・小砾
- ⑤2枚の黒色粘土（上層より第1 黒色粘土、第2 黒色粘土）
- ⑥灰色シルト
- ⑦黒褐色粘質土（第3 黒色粘土）
- ⑧褐灰色および灰色粘質土（弥生時代遺物包含層）
- ⑨緑灰色シルト
- ⑩緑灰色粘土・シルト～青灰色シルトである。

以下順に説明していくこととする。

①層は、層厚約17mも測る現代の擾乱土（産業廃棄物盛土）である。擾乱土の上面が現代の地表面で、T.P.+39mを測る。②層は第1面までの層で、3層に分けられる。近世以降の水田耕作土・床土と、③層上面即ち第1面の上に、耕作土が存在する。③層の明黄褐色粘土は、上層より明黄褐色～にぶい黄橙色粘土（鉄分・マンガン沈着）、灰白色・灰黄色シルト～微砂、灰黄褐色～にぶい黄橙色粘土（鉄分沈着）に細分される。第1面を形成しているのは明黄褐色～にぶい黄橙色粘土（鉄分・マンガン沈着）である。本層の上面では畦畔と鶴溝を確認し、この遺構面を第1面とした。本遺構面では東・南東側が西・南西側より10～20cmほど高くなっている。標高はT.P.+24.9～25mを測る。⑤層の第1黒色粘土は、層厚約20cmを測り、オリーブ黒色～黒褐色を呈している。層中には多くの炭化物が認められる。本層の上面の標高はT.P.+24.5～24.7mである。本層の上位には東側で褐灰色粘土が堆積し、更にこの層上に調査区全体に黄灰色粗砂～小礫の洪水中砂層が堆積している。この層を④層とする。⑤層の第1黒色粘土の上面では、遺構は全く見られなかったが、須恵器が若干出土している。この層の下に灰色シルト（やや砂質土気味）が存在し、更に第2黒色粘土が堆積している。第1黒色粘土とはほぼ同じ層厚である。第1黒色粘土と同様に炭化物が多く含まれていたが、遺物のみで遺構も見い出せなかった。

第2黒色粘土の直下には、極小礫を多く含んだ褐灰色粘砂質土または粘質土が、調査区全体を覆っており、さらに灰色シルトと細砂の互層が堆積する。この層を⑥層とした。調査区の南東側ではT.P.+24m付近では地形がやや低くなっている為に、⑦層の黒褐色粘砂質土が堆積している。粘質土は多くの砂粒を含んでるので、粘性を帯びる砂質土である。上層の黒色粘土と同じ様に炭化物を含んでいる。本層を第3黒色粘土とする。第3黒色粘土は調査区全体に存在せず、調査区の南東側においてのみ見られる。調査区中央部から西・北西部にかけては第2黒色粘土直下の褐灰色粘砂質土を除去するとすぐに青灰色砂礫土～シルトが検出され、青灰色砂礫土の上には第3黒色粘土は覆っていない。本層からは、弥生土器が出土している。

青灰色砂礫土の下層は、オリーブ灰色シルト・同色砂礫、更に⑧層の灰色粘質土が堆積している。灰色粘質土は層厚約20～30cmを測る土壤化した層である。本層は調査当初において層下より弥生時代の土器が出土するので、弥生時代遺物包含層と認識した。⑧層は直上層の灰オリーブ砂礫によって削られている所もある。またこの層の上面より切り込まれる流路も存在する。

⑧層を除去すると、遺物が多く検出される面がある。この遺構面を第2面とする。標高はT.P.+24m前後に位置する。第2面は緑灰色シルト（砂混じり）から灰色シルトを基層としており、⑨層に当たる。調査時では「青灰色シルト」と呼称していた。遺構としては流路と土器集積、木根跡がある。

⑨層の下層では、調査区全体に概ね⑩層が堆積している。調査は⑩層の下面で終了し、最終的にはトレンチ中央部に、長辺と平行する様にして、断ち割りトレンチをいた。以下この層について述べてみる。

⑩層の下層では層厚1.2～1.5mを測る流水堆積層（砂礫）が存在し、埋没河川と推測される。最低2回程の大きな流れを看取できる。砂礫層の下には、厚さ約20cmの炭化物を含む暗青灰色シルト質粘土がある。標高T.P.+21.9～22.1mに位置する。更にその下層には、緑灰色シルトが存在し、南東へ向かって大きく傾斜している。傾斜して低くなった所には、青灰色～オリーブ灰色シルト、緑灰色粗砂が堆積している。

2Cトレンチは1Cトレンチの南東に隣接している。調査地の字名は、1Cトレンチ同様に「池之内」である。地形的には2Cトレンチの南および南東から1Cトレンチに向かって傾斜し、低くなっている。

現地盤の高低差は約1m近くある。各時代の遺構面においても地形的には変わらず、南から北へ傾斜している。そのために高い所では、例えば古墳時代以前の遺構と弥生時代の遺構とが一緒に検出される事もある。

2Cトレンチも1Cトレンチ同様に、産業廃棄物盛土を除去して、遺構面は調査の最終面を含めると9面を確認した。層序としても最終面の9面まで大きく14層を確認した。その中で、先述した基準層と考えられる黒色粘土を3枚確認することができた。1Cトレンチの黒色粘土と2Cトレンチの黒色粘土が果たして同一であるかどうかは現在のところ不明であると言わざるを得ないが、今後この地域の調査にあたって時期を考える上で大きな基準層と考えて大過なかろう。

1Cトレンチ同様に先ず産業廃棄物の攪乱盛土を除去すると、旧表土・耕作土が検出される。この層の下位面を第1面とし、以下順に2面、3面とした。遺構面の時期は出土遺物より、第1・2面が近・中世、第3-0～3-1面は中世～中世以前、第4面・5面は古墳時代後・中期、第6面は布留・庄内式期、第7面は弥生時代後期・中期、第8面は弥生時代中期、第9面は弥生時代中期以前であると考えられる。以下、順に説明する。

産業廃棄物盛土を除去すると、旧表土・耕作土が確認できる。この層を除去すると更に耕作土と最初の遺構面が確認され、畦畔や鋤溝・足跡が検出される近世の水田面である。この面を第1面とし灰黄色砂質土をベースとしている。出土遺物には陶磁器類に混じって、埴輪片や窯壁が付着した須恵器も見られる。この層より10cm下げるとき黄褐色粘土、褐灰色粘土が確認される。明黄褐色粘土層の上面を第2面とする。出土遺物に瓦器・瓦質土器・土師器・須恵器が見られる。第3面は褐灰色粘土層中に白色微砂が薄く堆積しており、この層を除去した面を第3面とする。遺構はPit・杭列・溝・自然流路・足跡を確認した。白色微砂は1C・2Cトレンチにおいても確認している。本層から第1黒色粘土までは褐灰色粘土、褐灰色シルトが堆積する。8層の黒色粘土（第1黒色粘土）を除去した面を5面とし、出土遺物より古墳時代後期の水田面である。遺構は畦畔が主であるが、堤ないしは大畦畔や水口を有する小畦畔を確認した。第5面の形成層を除去すると、2枚目の黒色粘土（10層）が検出される。この層を除去して第6面が確認できる。遺構としては全体的に希薄であるが、調査区の南半部において畝・畝溝等が存在する。時期は布留・庄内式期と考えられる。本層以下では、地形が全体的に西側へ傾斜しつつ東・南東側が高くなっていることや、埋没流路の存在により、層序はやや複雑である。13層の3枚目の黒色粘土（第3黒色粘土）までは、調査区の西端と東端の層序の対応が可能である。第3黒色粘土を除去すると、調査区の北西端で弥生中期の水田面が確認される。面的には第8面である。第8面より下においては、最終の9面まで複雑な層序を示しているが、地形的にみても調査区の北西側が低く、南東から南側が高く、そのために南東から南側では面の確認は非常に困難なものになっている。第9面では自然流路等を確認している。

先述した様に1Cトレンチと2Cトレンチで検出した3枚の黒色粘土は高さ的にも対応し、更に1Cトレンチの第2面と2Cトレンチの第8面も出土遺物と層の高さより対応が可能であると考える。Dトレンチは丘陵上に位置するが、みかんを植樹し、開墾や造成によって削平されたため、地形は大きく改變されていた。検出された3基の古墳も墳形や規模は不明であるが、2号墳のみ一部の埴輪列によってからうじて墳形が推測できる。丘陵斜面には流土、礫（葺石？）、埴輪が流れており、特に西側と北側の斜面が顕著であった。丘陵上は現地表面を5～20cm下げるとき黄褐色の段丘礫と砂質土、あるいは粘質土の地山が検出される。遺構はこの地山を掘り込んでいた。但し2号墳の東斜面では、本丘陵が瘦せ尾

根である為に、斜面に土を入れて埴輪を樹立する為の布堀りを施している。西側の斜面に溝が掘削されているが、中世の時期と考えられる。

#### 4. D地区 1D・2D トレンチ

本調査区の遺構としては、弥生時代の落ち込み、古墳時代の古墳、土壙墓、土坑、中世の溝、Pit等がある。古墳は丘陵上に3基存在し、土壙墓は確実なものとして1基存在する。

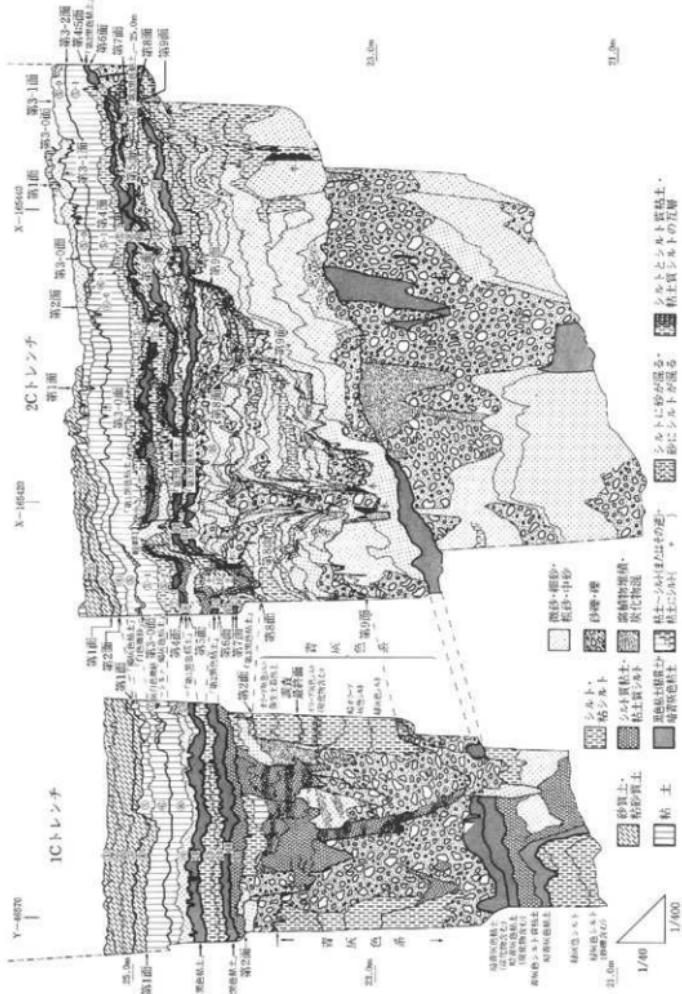


図141 1C・2C トレンチ層序概略図（北東壁面）

本調査区の丘陵はみかんの木が植樹された為に、削平・造成され、地形は大きく改変されている。3基の古墳は大半が消失しており、2号墳がかろうじて墳形を留めているにすぎない。

### 5. E地区 1E・2Eトレーニチ

E地区の遺構には弥生時代中期末葉のPit、落ち込み、溝、中世の溝、土坑がある。

遺構面は弥生中期末葉から16世紀後葉にかけての3面を確認した。これらの面を上層よりそれぞれ第1面、第2面、第3面として調査を行ったが、1Eトレーニチでは調査の都合上、第1面から第3面を最下層の同一面で検出し、調査を実施した。

第1面は盛土以前の耕作土、旧耕土を除去することにより検出される遺構面である。1EトレーニチではT.P.+24.5m付近に堆積する2.5Y6/3にぶい黄色粘土をベースとして掘削された溝、土坑を検出し、2Eトレーニチでは1Eトレーニチの溝の延長部と考えられる遺構を検出した。これらの遺構からは15世紀後半から16世紀代後半の遺物が出土している。

第2面はT.P.+24.1m~24.3m付近に堆積した植物遺体を含む7.5YR5/2灰褐色粘土を中心とする土壤化層が形成されており、2Eトレーニチでは粗砂により覆われていたために水田畦畔を明瞭な形で検出することができ、これを第2面として調査を行った。

なお、1Eトレーニチではこの土層の上面に粘土が堆積していたために、水田面を明確には検出できなかった。従って、畦畔を検出できたのは2Eトレーニチのみである。この面の耕作土内からは弥生土器細片が若干出土したのみで、遺構面の上下関係より弥生時代中期末葉以降、16世紀後葉以前とするしかない。

第3面はT.P.+23.7m~24.1m付近に堆積する10GY8/1明緑灰色シルトをベースとする遺構面で、第2面の水田土壤化層を除去することにより遺構が検出される。従って上層との堆積関係は不整合となる。遺構としては1EトレーニチでPit、落ち込み、2Eトレーニチで溝を検出したが、これらの遺構は概して浅いものが多く、上層の水田耕作に伴う土壤化により削平を受けたことが考えられる。Pitから弥生時代中期末から後期初頭の斐が出土しており、細片しか出土していない他の遺構についても、埋土が類似していることから推測し、この面の時期はこれに近い時期を与えることができる。

なお、第3面以下の層序に対しても、遺構、遺物の有無を確認するため、T.P.+22.0m付近まで

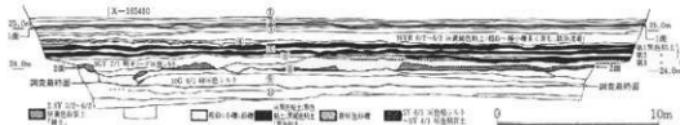


図142 1Cトレーニチ土層断面（南東壁）



図143 2Cトレーニチ土層断面（南壁面）

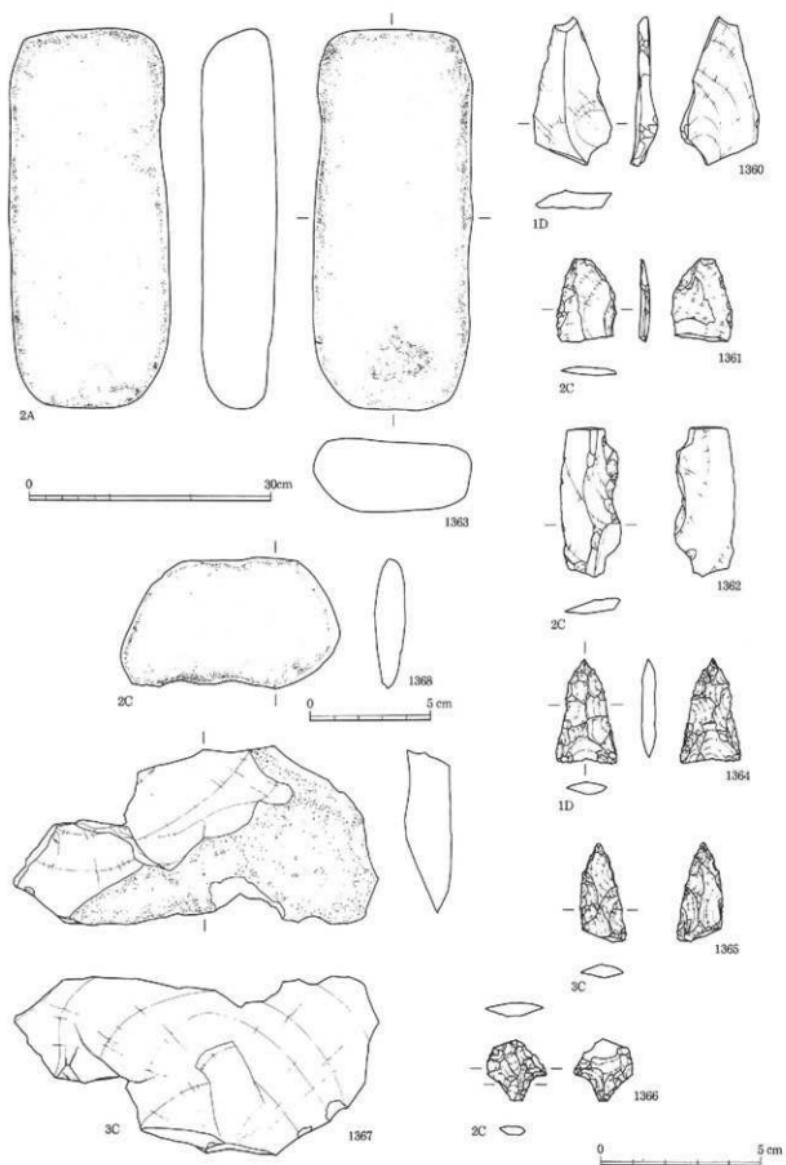


图144 河川6、包含层出土石器

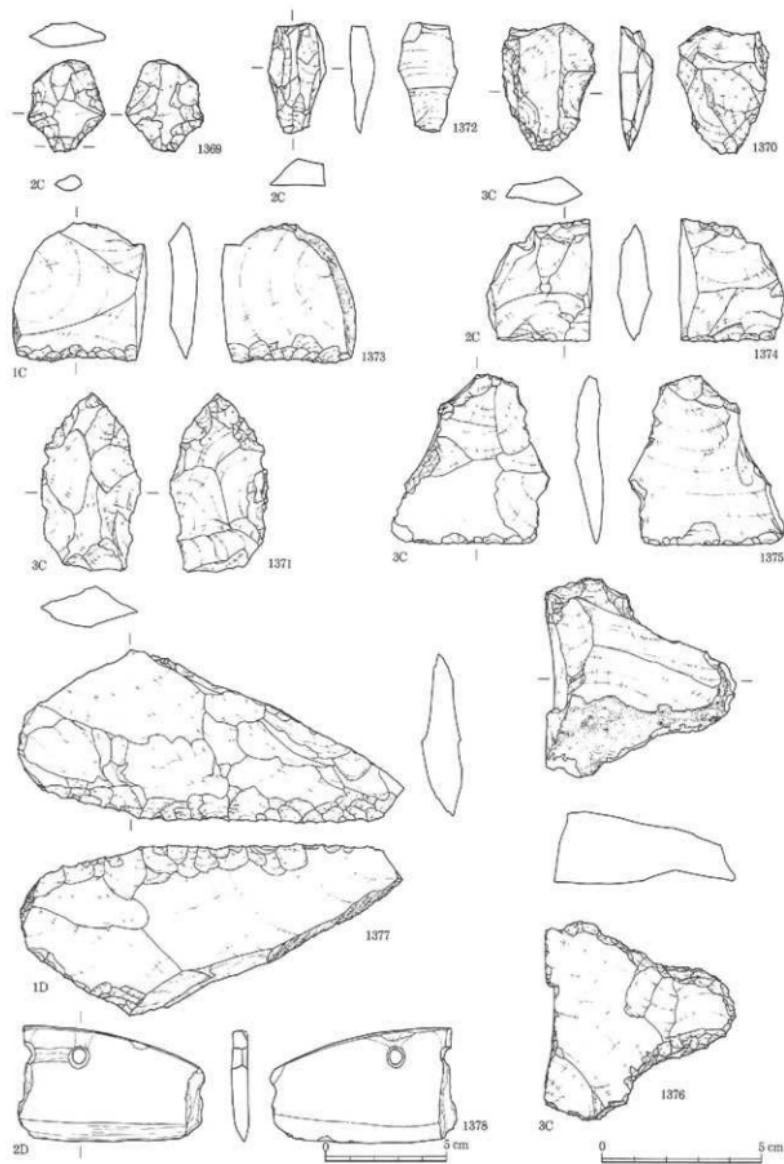


圖145 包含層他出土石器

断ち割りトレーナーを設定したが、東側に接して伏尾丘陵がひかえているにも関わらず、石津川の旧流路内堆積と考えられる砂とシルトの流水堆積層を確認したのみで、洪積層の確認はできなかった。また、この河川内堆積土からの出土遺物は確認できなかった。

## 第2節 弥生時代以前

### 1. 旧石器～弥生時代の石器（図144・145、写真図版125）

今回の整理において、旧石器の剝片1点（1360）およびナイフ形石器が2点（1361、1362）確認できた。いずれも破損しており、風化がみられる。1360が1Dトレーナー、1361、1362が2Cトレーナー出土である。

縄文時代と推測される石器として、2Aトレーナー出土の砂岩を石材とする石皿かと思われるものが1点（1363）出土している。大きさは長さ46.9cm、幅29.5cm、厚さ9.3cm、重さ17kgを測り、表裏面がなめらかで、一面が浅く窪んでいる。

弥生時代の石器と思われるものには1364～1371、1373、1375～1378、1539がある。それらはサヌカイトを石材とする石鎌、石槍、石錐、不定形刃器、剝片、緑色片岩を石材とする石庖丁、砂岩を石材とする使用痕のある石と叩石である。石鎌の完形は1364の1点だけであり、僅かに基部が凹む。1365は先端部が残存し、1366は凸基有茎式の基部が残存する。1365の石材は他と比較し、サヌカイトの質が粗い。1367は片面に自然面を残す剝片である。1368は扁平で表面の滑らかな砂岩砾であるが、左側縁と下側の縁に辺と直交する方向の細い筋がみえ、この痕跡は石庖丁の転用痕跡である使用痕跡と類似する。1369は石錐の錐部が欠損したものである。頭部の縁に自然面を留める。1370、1371は石槍の破片と思われるもので、1365同様、2点ともに質の粗いサヌカイトである。1370は基部のみ残存、1371は小型の石槍の基部が欠損したもののか。1373、1375～1377は不定形刃器である。1373は1辺に自然面を留め、サヌカイト

表11 伏尾遺跡石器一覧表

( ) 内既存

遺物No	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	残存状況	石材	備考
1360	翼状剝片	(45.5)	24.6	5.8	(6.4)	先端欠損	サヌカイト	風化
1361	ナイフ形石器	(25.5)	18.2	3.0	(1.8)	半分欠損	サヌカイト	少し風化
1362	ナイフ形石器	(45.5)	18.7	5.0	(4.8)	先端欠損	サヌカイト	少し風化
1363	石皿	469	195	93	17000	完形	砂岩	
1364	凹基式石鎌	31.5	18.7	4.2	2.2	完形	サヌカイト	
1365	石鎌	(30.7)	(14.0)	4.5	(1.7)	基部欠損	サヌカイト	質粗い
1366	凸基有茎式石鎌	(18.7)	18.5	4.0	(1.2)	先端欠損	サヌカイト	
1367	剝片	113.5	55.2	14.6	(71.3)	一部欠損	サヌカイト	
1368	使用痕のある石	90.7	53.0	13.0	85.1	完形	砂岩	周縁叩打？
1369	石錐	(28.0)	23.6	7.6	(5.7)	錐部欠損	サヌカイト	
1370	石槍	(38.8)	(28.6)	(9.6)	(9.1)	基部残存	サヌカイト	質粗い
1371	石槍？	(54.1)	30.9	12.6	(18.9)	基部？欠損	サヌカイト	質粗い
1372	楔形石器	33.8	17.5	7.3	4.6	完形	サヌカイト	少し風化
1373	不定形刃器	40.6	42.5	9.2	21.1	半分欠損か	サヌカイト	やや質粗い
1374	楔形石器	32.5	36.7	11.1	15.7	ほぼ完形	サヌカイト	少し風化
1375	不定形刃器	51.6	(48.1)	9.2	(21.3)	一端一部欠損	サヌカイト	
1376	不定形刃器	61.2	59.3	24.7	(81.4)	一部欠損	サヌカイト	
1377	不定形刃器	119.1	51.7	17.0	(80.3)	一部欠損	サヌカイト	少し風化
1378	石庖丁	(76.7)	46.0	7.1	(44.1)	半分欠損	緑色片岩	
1539	叩石	64.4	59.3	49.8	249.6	完形	砂岩	

トの質は少し粗い。1375は使用によるものか下辺の縁は少し磨滅している。1376は片面に自然面を残す。その周縁は潰れており、特に左側縁を除いた部分に著しいが、使用によるものか不明である。1377は背部の両端2ヶ所に自然面を留め、全体に少し風化している。1378は杏仁形の石庖丁の半分欠損したものである。刃先は使用によるものか磨滅している。紐孔部には表面（刃面側）では長軸と平行する方向に、裏面では背側へのびる紐ずれの痕跡が残る。

1372、1374は楔形石器と思われるもので、時期は不明である。2点ともに相対する辺に階段状の剥離がみられる。2点ともに少し風化している。

1539は1Eトレント溝1出土の叩石で、砂岩円礫に叩打痕跡がみられる。

## 2. 繩紋時代遺構および遺物（図146・147、写真図版118・126）

2Aトレントより、繩紋時代と推測される河川が1条検出されている。遺物は2Aトレントの包含層、1Cトレントの流路2、3Cトレントの包含層から、繩紋土器片が僅かに出土している。

河川6は2Aトレント北半部に位置し、T.P.+19.2~18.4mで、幅約11m、厚さ0.8mを測る砂礫（にぶい黄褐色砂礫）の堆積で確認された。出土遺物に図144-1363の石皿が1点あり、繩紋時代と推測される。

河川6以外に、古墳時代以前の河川4、5が確認されている。河川4は1Aトレントの古墳時代河川である河川1・2の下層に位置し、断面観察で確認したのみであった。詳細な規模は不明であるが、推定幅は約11m、深さ1.7mを測ると思われる。

古墳時代面の下層において、1Aトレント北端でT.P.+18.6~17.3mに介在する灰色砂礫とシルトが厚く観察され、河川の存在が推測されるが、更に、この層を切り込むようにして、河川1と河川2の下層に幅約20m、深さ約1.5mの河川5が検出された。なお本河川底の下で検出された青灰色の粘土はMa10層に相当する層である。

繩紋土器片は4点出土しており、大阪府教育委員会の大野薰氏の御教示を得た。

図147-1379・1380は1Cトレントの弥生時代の流路2出土である。1379は中期船元II式深鉢細片である。外面が灰黄色、内面が褐灰色を帯び、胎土中に3mm以下の石英、長石、チャート粒を多く含む。外面には単節のLR繩紋が施されており、内面はなでられている。外面上端部に1条の沈線が僅かに残る。

1380は後期以前の浅鉢細片である。外面が暗灰黄色、内面がオリーブ褐色である。胎土中に3mm以下の石英、長石、チャート粒を多く含む。外内ともにナデ調整で、粘土接合痕は内傾である。

1381は2Aトレント最上層の攪乱層より出土の晩期船橋式の浅鉢か不明のものである。外面の稜部下方は横方向の削り、外面上半はナデ、内面は横方向のミガキが施されている。外面が黒褐色、内面が黒色である。胎土中に3.5mm以下の長石、石英、2mm以下の角閃石、金雲母を多く含む生駒西麓産の土器である。

1382は3Cトレント第7、8層出土の晩期長原式の深鉢細片である。口縁端部の刻み目が省略された新しい傾向を示す。外面は灰黄褐色、内面は褐灰色である。調整は残存状況が悪く不明だが、ナデか。胎土中には2mm以下の長石、石英を多く含む。

## 3. 弥生時代遺構および遺物（図148~166、写真図版116・117・126~128）

弥生時代の遺構としては1Cトレント第2面の流路、土器集積、2Cトレントの第9面、第8面の畦畔、杭列、溝、第7面の溝、杭列、3CトレントPit、Dトレント落ち込み、Pit、EトレントPitなどがある。遺物はII様式からV様式までみられる。2Aトレントの包含層からも土器が出土している。以下、Aト

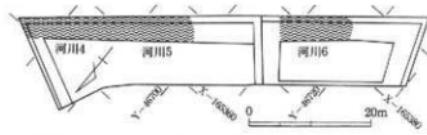


図146 1A・2A トレンチ河川4・5・6平面図

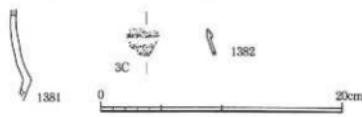


図147 包含層他出土繩紋土器



図148 1C トレンチ第2面平面図

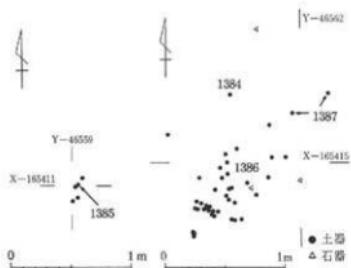
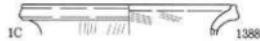
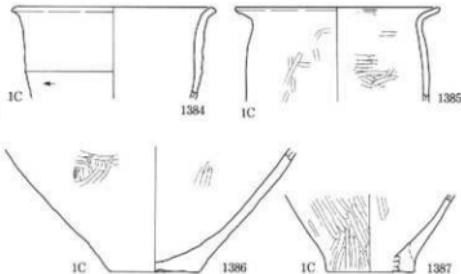
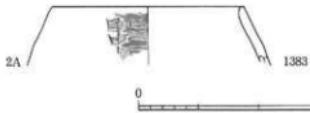


図149  
土器集積1分布

図150 土器集積2分布

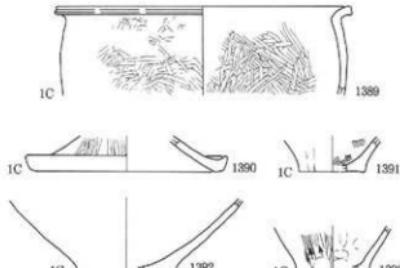


図151 土器集積、包含層出土弥生土器

レンチから順に記す。

(1) 2A レンチ (図151)

最上層擾乱層からII様式の無頸壺(1383)が出土している。体部には櫛描直線文の末端に扇形文を施しており、1.7cm幅に13条1帯の櫛原体を用いている。色調は外内ともに灰白色、断面は浅黄橙色である。胎土中に3mm以下のチャート、長石、石英粒を少量含む。

(2) 1C レンチ (図148~152、写真図版117)

図148は1C レンチ第2面の遺構平面図である。第2面はT.P.+24m前後に位置する。地形的には南側が高く北側へ緩やかに傾斜している。遺構としては自然流路と土器集積がある。他には木の根を確認している。

自然流路は2条確認した。流路1は北端矢板に沿うようにして平行しており、流路2は南西から北東へ向かって、先の流路へ流れ込むようにして存在する。調査中は遺物を別々に取り上げたが、本来一つで繋がって同時期に流れ、実は本流が流路1で、支流が流路2であったと推測される。これらの流路は、ここでは便宜上別々に説明する。

流路1は調査区内で全長16mを確認し、調査区外へ延びる。幅は約4m以上、深さ約0.4~0.9mを測る。埋土は上層より大きく3層に分けられる。上層より褐灰色粘質土(腐植土混じる、腐植植物堆積砂がラミナ状に入る)、黄灰色粘質土(腐植植物堆積、砂がラミナ状に入る)、灰色砂礫(粗砂~極小礫、腐植植物堆積)である。出土遺物には弥生土器がある。図152~1396は最下層出土である。

流路1からは図152~1394~1396の土器が出土している。1394は中期の壺で、口縁端部を上下に拡張し、下端部に刻み目を施している。調整は外内はハケ後ナデないしヘラ磨きが施されている。色調はにぶい黄橙色、外面体部に煤が付着している。胎土中には1.5mm以下の石英、長石、チャートを含む。1395はII様式の壺体部破片で、櫛描直線文帶間に1条のヘラ磨きが施されている。施文には2cm幅に12条1帯の櫛原体を用いている。色調は外内とも黒褐色、断面にぶい黄褐色である。調整は外面磨き、内面下半ハケ、上半ナデ、磨きがみられる。胎土中には7mmの石英1粒、3mm以下の石英、長石、角閃石を多く含む、生駒西麓産の土器である。

1396はI~II様式の不明底部破片で、上げ底を呈する。外内面ともにナデ調整である。色調は外面灰黄褐色、内面黒褐色、断面浅黄橙色である。胎土中には4mm以下の石英、長石、チャートを多く含む。

流路2は調査区内で全長9.5mを確認した。幅約1.5~3m、深さ約65cmを測る。埋土は上層より灰色粘土、オリーブ灰色シルト、腐植土混じりの灰色シルト~粗砂・極小礫、炭化物を含むにぶい黄色・灰色砂礫に分かれる。遺物は最下層の弥生土器片に混じって、先述の網紋土器片(図147~1379・1380)が出土している。

土器集積は2ヶ所で検出した(図148~151)。1ヶ所は調査区の北東端の木の根跡の側で、もう1ヶ所は調査区の南東端に位置する。これらは土坑、落ち込みの様な遺構が全く認められず、集積というよりも散布地、あるいは通常土器群、もしくはそれに相当する遺構である。集積は径3mの範囲に広がっており、土器と共にサヌカイト剝片も一緒に検出された。土器は少なくとも3ないし4個体確認している。

土器は破片が多く出土しているが、そのうち口縁部2片、底部2片を確認しており、他は体部破片である。

図151~1385が土器集積1出土、1384、1386、1387が土器集積2出土である。

1384は緩く外反する口縁部の形態に、体部下半外面を横方向にヘラ削り、外面上半および内面はナデ調整を施している。胎土中に4mm以下の結晶片岩を多く含むII様式の紀伊型甕である。外面には煤が付着し、内面の体部下半には焦げが見られる。

1385は外反する口縁部の形態に、外内面をヘラ磨き調整し、胎土中に2mm以下の金雲母、1.5mm以下の角閃石を含む、II様式の河内型甕である。

1386はII様式の甕と思われる黒斑のある底部破片である。表面が剥落しているが、一部外内にヘラ磨きの痕跡が残る。胎土中に7mm以下のシャモット1粒と、7mm以下の花崗岩、石英、長石粒を多く含む。

1387はII様式の甕と思われる底部破片である。調整は外面ヘラ磨き、内面は一部にヘラ磨きの痕跡が残る。色調は外内ともに灰褐色である。胎土中に7mmの花崗岩1粒、3mm以下の長石、石英、角閃石、金雲母を多く含み、生駒西麓産の土器である。

第2面の直上に堆積する⑧層の上面を切り込む様にして浅い流路が走行する。本遺構の上には約0.3mの灰オリーブ色砂礫・シルトが厚く堆積しており、本遺構は洪水によって抉られ、この部分が流心であったものと推測される。遺物としては1389の中期壺口縁部がある。外反する口縁の端部は面をなし、1条の凹線が巡る。体部は外内ともにヘラ磨きである。胎土中には1.5mm以下の長石、石英、チャート粒を多く含む。色調は外内ともに淡黄色である。

黒色粘土層と青灰色砂礫層では、いずれも層面より遺構は検出されていないが、遺物のみが若干出土している。黒色粘土層からは須恵器出土のため後述する。

青灰色砂礫層出土遺物に弥生土器がある（図151-1388、1390～1393）。

1388は中期壺口縁部である。口縁端部は上方に拡張し、端部外面に凹線が1条巡る。頸部の調整は外内ともハケのちナデである。色調は外内ともに淡黄色、外面口縁部に煤の付着がみられる。胎土中に1mm以下の石英、長石、チャートを含む。

1390は中期高杯脚部である。調整は外面ヘラ磨き、内面は一部にヘラ磨きの痕跡を留める。色調は外内にぶい黄橙色である。脚内面に煤が付着していることから、蓋に転用されたものか。胎土中に2mm以下の石英、長石を少し含む。

1391は中期壺底部と思われる破片である。調整は外面は表面が剥落しており不明、内面底部に蜘蛛の巣状のハケが施されている。色調は外内ともにぶい黄橙色である。胎土中には2mm以下の石英、長石、チャートを含む。

1392は中期壺底部と思われるものである。調整は体部外面に僅かに磨きの痕跡が残り、内面は不明である。色調は外内ともにぶい黄橙色である。胎土中に4mm以下の石英、長石、チャートを少し含む。

1393は中期壺底部と思われる破片である。調整は外面は縦方向のヘラ削り、内面は指押さえ、ナデである。色調は外内ともにぶい黄橙色である。外面に煤が付着している。胎土中には2mm以下の石英、長石、チャートを含む。

### (3) 2C トレチ第9面（図153、写真図版116）

第9面は2C トレチの最終遺構面である。この面からは自然流路、Pit、木の根痕跡が検出された。南半部は上層の第8面とさほど変化はなく、北半部では水田の下層にあたるが、2条の自然流路を検出した。Pitは第8面と同様に調査区南東隅の微高地上と、微高地の先端部に存在する。南東隅のPitは第8面と重複しているものもあるが、杭列と考えられるものもある。なお北側と南側の比高差は約2.2mを測る。

Pitは微高地上では第8面と第9面のレベル差はあまりなく重複しているものもある。流路付近に位置する事は重要と思われる。

自然流路は上層で検出した流路も存在し、基本的に上層の流路と主軸を同じくしている。木の根は調査区の北半部、流路内に見られる。

第9面からの出土遺物は中期の鉢口縁部が1点(1397)と、先述の使用痕跡のある砂岩礫が1点(1368)出土している。1397は外面が剥落し、文様、調整ともに不明、内面に微妙にヘラ磨きの痕跡が残る。色調は外内ともににぶい褐色を呈する。胎土中には4mm以下の石英、長石、チャートが多く含む。

#### (4) 2C トレンチ第8面(図154~157、写真図版116)

第8面は、第7面をベースとしている黒色粘土、つまり⑬層の「第3黒色粘土」を除去して確認される面である。地形は北端がT.P.+24.07mで、南端ではT.P.+24.8~24.9mを測り、北西側に向かって傾斜している。

主な遺構としてはPit、流路、水田、杭列、足跡が存在するが、調査区の南半部にPitと流路が、北半部に水田面が広がる。水田では畦畔と島状高まり、足跡、杭列を確認した。

流路は溝19~21、22が基本となる。流路は溝22を除いて自然流路と推測されるが、ここでは調査中の呼称に従う。

溝19は南東から北西にのびるやや微高地の裾部へ流れる。流路はほぼ南東から北西へ蛇行しつつ、また分岐しながら流れ、北側で溝20、21と合流する。幅は上端の肩部で3m、深さ0.6~0.8mを測る。埋土は砂礫が堆積しているが、大きく2層に分けられ、下層は径1~4cmの礫が多い。上層は粗砂から中砂が多く、腐植植物の堆積が見られる。出土遺物にはサヌカイト剝片や、甕(図156~1398)、高杯などの土器片がある。1398は中期の甕である。口縁は端部を上方へ少し拡張している。調整は残存状況が悪く不明瞭だが、外面ヘラ磨き、内面ナデか。色調は外内ともにぶい黄橙色である。胎土中には3mm以下の石英、長石、チャートが多く含む。

図157~1399は第8面出土のII様式の河内型甕である。外反する口縁端部は丸くおさめている。調整は外内ともヘラ磨きを施している。色調は外内とも黒褐色である。胎土中に7mmの石英1粒、4mm以下の石英、長石、1.5mm以下の角閃石、金雲母を多く含む、生駒西麓産土器である。

溝20は溝19と離れて位置するが、南東側で接している。本溝も南東から北西へ流れている。溝20と21の合流する所に、丸太材を検出した。丸太材は長さ2.6m、径45cmを測り、土層観察ではこの木の上に、人為的に盛土されていることが看取できた。

丸太材はもう一ヵ所でも見られる。溝20の東側の幅狭の流路の入り口で、長さ1.5m、径13~17cmを測り、2ヵ所に枘穴を穿っている。溝21は溝20の東側に位置しており、主軸は北東~南西方向におき、流れは北東から南西へ流れている。溝19・20に合流する。

溝22は溝20の北側に位置し、溝は蛇行するものの、主軸を北東~南西方向におく。規模は幅0.7m、深さ0.1mを測る。溝の流れは先の溝とは異なり、南西から北東へ流れれる。埋土は灰オリーブ色である。

水田面は調査区の北側で、大小の畦畔と足跡、高まり、杭列等の遺構を確認した。畦畔は主軸が若干振るもの、東西南北方向におくものと(畦畔1~4)、溝22にかかる畦畔5の様に、蛇行するものとがある。畦畔が東西南北方向に主軸をおくものは、おそらく方形の小区画の水田面を形成しており、調査区の北西端において見られる。南北の畦畔1・2は0.5mとやや幅が広く、高さも6cmと高い。この畦畔は途切れる箇所があり、水口としての施設であろう。この畦畔から幅の狭い畦畔3・4がほぼ直角

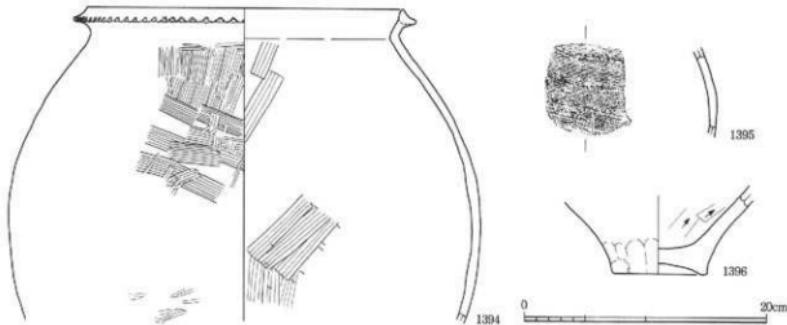


図152 1C トレンチ流路1. 包含層出土弥生土器

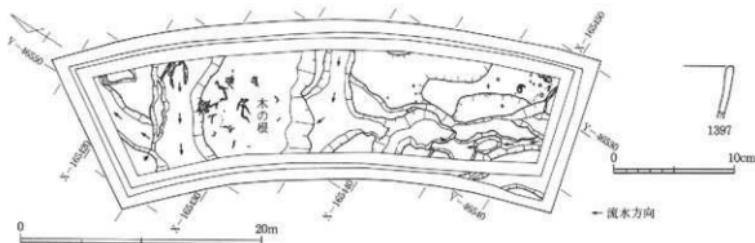


図153 2C トレンチ第9面平面図および出土遺物

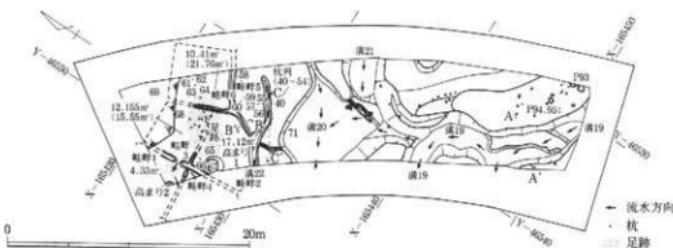


図154 2C トレンチ第8面平面図

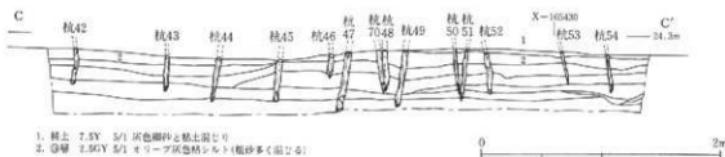


図155 2C トレンチ第8面杭列断面図 (杭42~54)

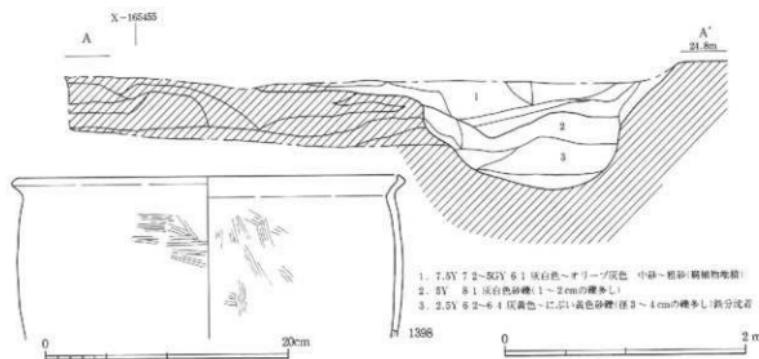


図156 2C トレンチ第8面満19断面図および出土遺物

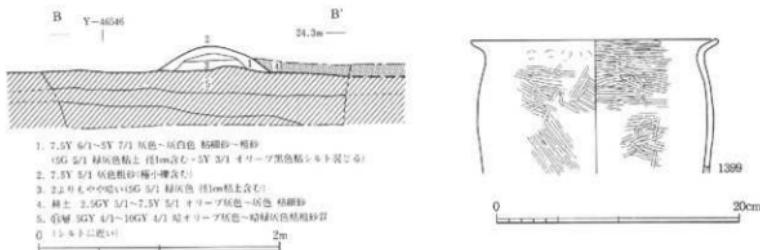


図157 2C トレンチ第8面満5断面図および第8面出土遺物

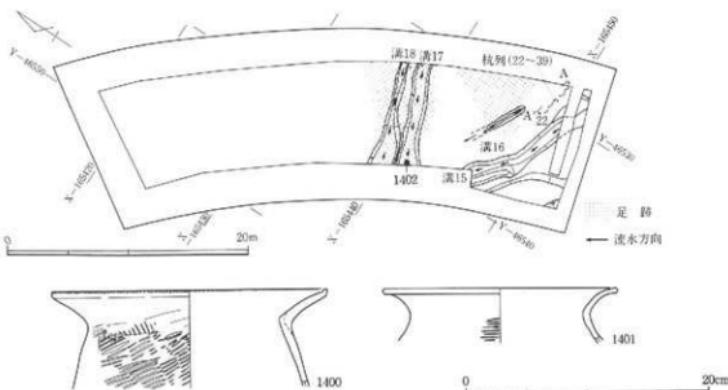


図158 2C トレンチ第7面平面図および溝15出土遺物

に直交して造られる。畦畔4も途切れている部分があり、畦畔1・2と同様に水口としての機能を有していたと推測される。

畦畔3は北西—南東方向に延びる幅の狭い畦畔6に延びていかない。畦畔6付近では足跡が顕著に見られる。この付近の畦畔を見ると、先述した北西端の畦畔とやや異なり、溝20から弧を描きながら東へ延びる幅の広い畦畔5と、足跡の北側に北西—南東方向に延びる幅の狭い畦畔6が存在する。この畦畔6は畦畔5にはほぼ直角に繋がり、方形の区画面を有する。畦畔5は下端部（裾部）の幅が0.45～0.7mを、高さ5～6cmを測る。盛土は灰色系の細砂から粗砂で、粘土及び粘シルトがブロック状に混入し、極小礫を多く含んでいる。

なお畦畔5は杭53・54の所で、西に向かってやや突出しているので、小畦畔が造られていた可能性もある。この畦畔は恐らく畦畔1～4に繋がっていくものと推測される。

高まり2は2基確認した。高まり1は畦畔2に接しているもので、高まり2は畦畔4の西側に存在するものである。

高まり1は平面形が不整な円形を呈しており、上端部径約1m、下端部径約1.5mを測る。高まりは土を盛ったものではなく、遺構面の形成層を削って台地状にしたものである。

高まり2は調査当初は畦畔としての可能性も考えたが、主軸方向、大きさ、削り出されている事の3点から、高まり1と同様な遺構と考えた。

杭列は溝20から北側、すなわち水田面に多く見られる。規則的に見られるのは、溝22の南側に隣接するもので、北東—南西方向に主軸をおき、やや蛇行するものの、一直線に並んでいるものである（杭40～54）。他には区画内に打たれているものもある（61～64、65～67、68・69）。また杭55・57・60・64・69は、杭40～54の杭列とはほぼ直角になる。さらに杭58・59と、杭61～64は40～54の杭列と平行する。

足跡は畦畔1・2と畦畔6の間で検出し、不規則な歩行状態が窺える。なお足跡は溝22の方へは歩いていないので、畦畔6から西側の畦畔3へ延びる畦畔が、足跡付近にもあったものと推測される。

Pitは南東隅の微高地上と、微高地の先端部、さらに流路の付近に存在する。Pitは大きさと深さ、そして埋土で分類できる。大きさでは径が0.5m前後のもの、径0.2～0.3m前後のもの、径0.2m前後のものの3種である。深さは径が0.5mのものは深く、径0.3m以下のものは非常に浅い。埋土についてみると灰色系と黄灰色系に分かれ、0.5mのPitは黄灰色系である。質としては粘性の砂質土～粘性のシルト、粘性の微砂～細砂の3種である。粘性の砂質土～粘性のシルトは調査区の南東隅に多く、0.5mのPit、0.3mのPitに多い。微砂～細砂を埋土に持つものは微高地先端部に多い。これらのPitは規則的に配置されていない。Pit93は径が0.45～0.5m、深さ0.3mを測る。埋土を観察すると、礫と粘土がブロック状に混入しており、埋め戻されている。

#### （5）2Cトレンチ第7面（図158～160、写真図版116）

第7面は第3黒色粘土の上に堆積する⑫層を除去して確認できる面である。地形的には北に向かって徐々に緩やかに低くなり、南西隅で非常に高くなる。北側と南側の高低差は約0.6mある。高台部分は段丘崖に相当する。遺構は南端に集中しており、4条の溝と杭列を確認した。

溝15は調査区の南西隅に位置し、主軸を南東—北西方におき、蛇行しながら走行する。溝の流れは北西に向かって流れている。規模は幅1～2m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は灰白色小礫・中砂、同色中砂とシルトとの互層で、出土遺物に甕や壺がある（図158～1400～図160～1403）。

1400はV様式の甕である。くの字状に外反する口縁端部は僅かに上方につまみあげられ、上端部には

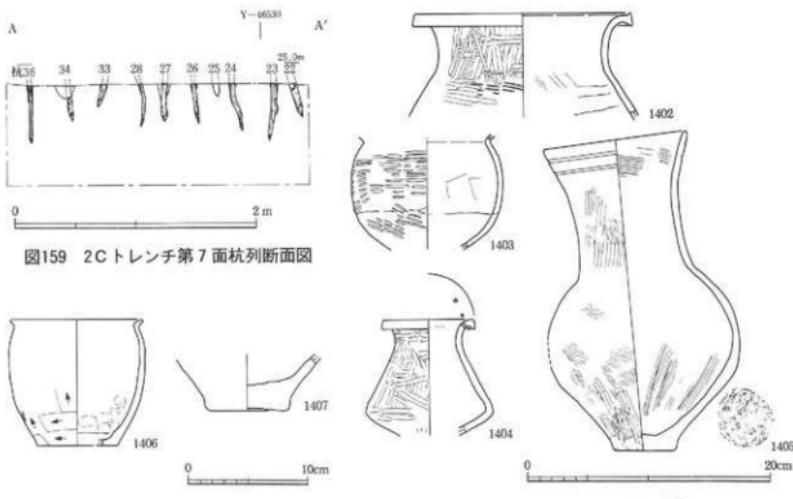


図159 2Cトレンチ第7面杭列断面図

図160 2Cトレンチ出土遺物

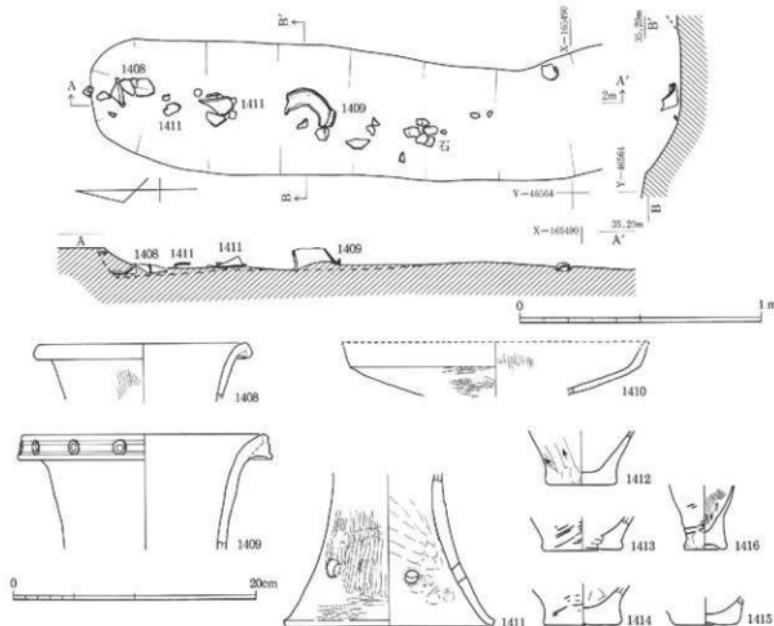


図162 Dトレンチ落ち込み8遺物出土状況図および出土遺物

刻み目が施されている。頸部内面の屈曲部分は直角に近い。体部外面には叩き目が、内面にはナデがみられる。色調は外内ともにぶい黄橙色で口縁部外面に一部煤が残る。胎土中には径4mm以下の石英、長石、チャートを多く含む。

1401はV様式の壺である。くの字状に外反する口縁の端部は丸く収めている。体部外面には叩き目、内面はナデである。色調は外面黒色、内面黒褐色で、外面には煤の付着がみられる。胎土中には5mm以下の石英、長石、チャートを含む。

1402はIV様式の壺である。頸部から肩にかけてなだらかに広がり、僅かに上方へ広がる頸部は口縁寄りで更に外反し、口縁端部は上下に拡張する。調整は外面はヘラ磨き、内面はハケ後ナデである。

1403はV様式の壺部である。外面は叩き目、内面はナデ調整である。色調は外内ともにぶい黄橙色で、外面には煤が多く付着している。胎土中には2.5mm以下の石英、長石、チャートを含む。

溝16は溝15の北側に約3m離れて位置する。本溝は溝15と主軸、流れともに同じである。幅は0.6m、深さは4~7cmを測る。色調はにぶい黄橙色である。胎土中に1mm以下の石英、長石、チャートを含む。

溝17・18は先の溝15・16とは主軸は異なり、北東一南西方向におく。規模は溝17が最大幅2m、深さ約15cmを測り、溝18は最大幅2.5m、深さ10cmを測る。出土遺物としては溝17の小形壺(1404)と壺がある。なお溝17・18には足跡が多く認められた。

1404は中期の壺である。短い頸部から外反する口縁部には2孔1対の紐孔がある。調整は体部外面に微妙にヘラ磨きが残る。胎土中に4mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は明褐色を呈する。

1405は調査区の南端、土層観察用の側溝掘削時に出土したもので、第3黑色粘土層内出土の後期長頸壺である。一部破損しているが、ほぼ完形である。口縁部には2条の凹線が巡る。頸部より口縁部にかけて斜めに歪み、表面は剥落、磨滅しているが、一部に調整が残る。調整は外面では頸部に縦ハケ、体部にハケ、体部下半にはハケ後ヘラ磨きが、内面は口縁部に横ハケ、底部から体部にかけて縦ハケが施されている。胎土中に3mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は外内ともに灰白色ないしにぶい黄橙色、断面は橙色を呈する。体部には黒斑が1ヶ所にみられる。

#### (6) 3C トレンチ (図161)

3Cトレンチ出土遺物は堤2およびその下より出土している。1406は中期の小形壺である。調整は外面体部上半は不明だが、底部直上の外面にヘラ削りが、内面にはナデが施されている。胎土中に2mm以下の石英、長石、チャート、クサリ蝶又はシャモットを含む。色調は外内ともにぶい黄橙色で、外内とも一部に褐灰色がみられる。

1407はI~II様式の不明底部である。厚い底部に径3mm以下の石英、長石、チャートを多く含む粗い胎土を持つ。色調は外内とも淡黄色、断面は明赤褐色である。調整は残存状況が悪く不明である。

#### (7) D トレンチ (図162~164・181、写真図版117)

Dトレンチの弥生時代遺構として落ち込みとPit2基がある。

落ち込み8は調査区の東端、2号墳の東斜面裾部に位置し、標高T.P.+35.15~35.23mにある。落ち込みは幅約0.5m、深さ約0.1~0.15mを測り、北東から南東へ弧状に延びる。遺構は浅く溝状を呈している。埋土は淡灰黄色粘質土である。遺構内からは弥生中期から後期の壺、高杯、器台脚部、甕底部、製塙土器等の土器と破片が出土している(図162~1408~1416)。本遺構出土の遺物は剥離磨滅が著しい。

1408・1409は後期の壺口縁部である。2点とも口縁端部の垂下部分ないし拡張部分には粘土帯が貼り足されている。1408は胎土中に3mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は外内淡黄橙色、断面橙

色を呈する。調整は外面頸部に微かにハケ目が残る。

1409の口縁端部には3条の凹線の上から円形竹管文を施している。色調は橙色を呈する。胎土中に4mm以下のチャート、長石、石英を含む。調整は不明である。

1410は後期の高杯破片である。口縁端部は剥落しており、不明である。調整は外内に微かにヘラ磨きが残る。胎土中に3mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は外内ともにぶい橙色である。

1411は後期の器台と思われる脚部である。推定で5ヵ所に透かしの円孔がある。調整は外面縦方向のハケ後ヘラ磨き、内面はハケ後ナデである。外面脚据部に一部、赤色物質を塗付した痕跡がみられる。胎土中に3mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調はぶい橙色、褐灰色で、断面が橙色である。

1412は中期の甕と思われる底部である。調整は外面を縦方向にヘラ削りし、内面は不明である。胎土中に3mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調はぶい橙色、底部外側が褐灰色である。

1413は後期の不明底部である。調整は外面が叩き目、内面は不明である。胎土は2mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は外面は黒斑のため黒色、内面は灰白色である。

1414は後期の壺と思われる底部である。調整は外面は叩き後ナデか、内面は蜘蛛の巣状に近いハケである。底部外側は僅かに上げ底状をなすが、底部製作時のドーナツ状粘土の痕跡か。胎土は2mm以下の長石、石英、チャートを含む。色調は外面にぶい橙色、内面は明褐灰色、底部は外内ともに黒色である。

1415は後期の壺と思われる底部である。調整は表面が大部分剥落して不明である。胎土中に4mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は橙色である。

1416は後期の製塙土器の脚部である。調整は外面手づくね、内面はハケ状の痕跡を留める。胎土中に5mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は外面浅黄橙色、内面は黒色である。

Pit 9（図163）は2号墳と3号墳の中間に位置し、古墳時代前期の落ち込み5とは約3m離れている。Pitは平面形が円形を呈しており、径0.58m、深さ約14cmを測る。埋土は黒褐色粘砂質土である。出土遺物には1417・1418の後期の壺がある。1417は磨滅が著しく、調整は不明である。1418は口縁端部に縦線3条1単位で数ヵ所に施されおり、調整は外面がナデ、内面肩部に指押さえが残る。2点ともに胎土中に3～4.5mm以下の石英、長石、チャートを含み、色調は浅黄橙色である。

溝7（図164）は1号墳の東側に位置し、北西から南東方向に走行する。残存長1.4m、幅0.68m、深さ12cmを測る。埋土は上層が黄灰色～黒褐色粘砂質土（炭化物混入）で、下層が褐色砂質土である。遺物としては1421の後期の壺かと思われる底部がある。調整は外面に磨き、内面に蜘蛛の巣状のハケがみられる。胎土中に4mm以下の石英、長石、チャートを含み、色調は赤橙色である。底部から体部にかけて黒斑がある。

包含層出土遺物として、表土を除去した段階で採集した遺物、または遺構面で確認した遺物がある。石器については第1項で先述の図144～1364、図145～1377、1378である。土器には後期の壺（図163～1419、1420）がある。

1419は表土除去段階で採集したもので、頸部外面に僅かに縦方向の磨きが残る。胎土中に3mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は外面橙色、内面はぶい橙色である。

1420は遺構面で採集したもので、頸部外面に縦方向の磨き、内面に横方向のハケが残る。胎土中に3mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は外内ともに浅黄橙色で、内面の一部は赤色物質を塗付していたものか、橙色を呈する。

(8) 1E・2Eトレンチ第3面（図165・166、写真図版117）

1Eトレンチ第3面はT.P.+23.7mから24.1m付近に堆積する10GY8/1明緑灰色シルトをベースとする遺構面で、第2面の水田土壌化層を除去することにより遺構が検出される。従って上層との堆積関係は不整合となる。

遺構としては1EトレンチでPit4基、落ち込み2ヵ所を検出し、2Eトレンチでは溝1条を検出したが、これらの遺構は概して浅いものが多く、上層の水田耕作に伴う土壌化により削平を受けたことが考えられる。

落ち込みは2ヵ所検出した。西側の落ち込みは南北3.5m、東西1.2m以上、深さ0.25mを測り、埋土は2.5Y5/3黄褐色粘土である。東側の落ち込みは、南北9.0m以上、東西1.5m以上、深さ0.2mを測り、

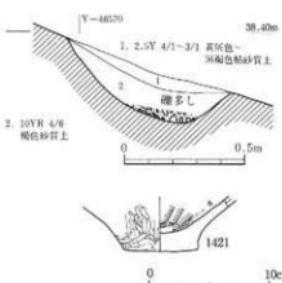
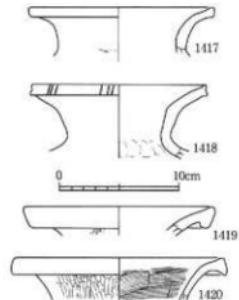
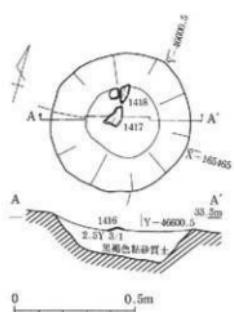


図163 DトレンチPit 9 平・断面図およびPit 9他出土遺物

図164 Dトレンチ溝7 断面図および出土遺物



図165 1E・2Eトレンチ第3面平面図

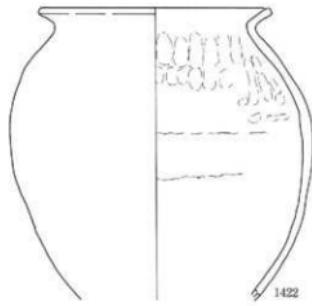


図166 1Eトレンチ第3面Pit3平・断面図および出土遺物

埋土は2.5Y5/3黄褐色土である。溝は長さ2.0m以上、幅0.8m、深さ0.05mを測り、埋土7.5YR5/2灰褐色粘土である。これらの遺構からの出土遺物は、細片が出土したのみで皆無に等しい状況であったが、Pit内の1基からIV～V様式の甕（図166～1422）が出土した。他の遺構についても埋土が類似していることから推測することができるならば、これに近い時期を与えることができよう。

1422は口縁部の約1/2強が残存する。表面が剥落、磨滅し、調整が不明瞭であるが、外面はナデか。内面には指押さえの痕跡を留める。胎土中に4.5mm以下の石英、長石、チャートを含む。色調は灰白色で、口縁の一部が淡赤橙色、口縁部および内面の表面の剥落が著しい部分は黒色である。

### 第3節 古墳時代

#### 1. A～C地区の遺構および出土遺物

1A・2Aトレンチでは河川が計4条検出されている。2Cトレンチでは第3面～5面の各遺構面とそれに伴う遺構が、1Cトレンチでは包含層が確認されている。

##### (1) 1Aトレンチ（図167、写真図版118）

1Aトレンチでは河川1～3が検出された。

河川1は1Aトレンチの北東に位置し、ほぼ東西方向に走行する。規模は幅約4～8m、深さ約1.8mを測る。本遺構は河川2が形成された後に、河川2を切る様にして形成された。埋土は上位に径1cmの礫を含む粗い砂礫で、下位は砂層からシルト質粘土である。出土遺物には須恵器等があり、多く出土している。時期はII-2～3段階のものが多い（1423、1425）。他にI-2段階の壺片1点やII-3～4段階の杯蓋細片が数点ある。中世土釜の細片がみられたが、混入と思われる。下層からは風化の著しい縦長の剥片が1点出土している。

1423は焼け歪みの著しいII-2段階の杯蓋で、1/2個体残存する。稜は沈線状に退化し、口縁端部は内傾する。内面は焼き彫れ、外面には灰を被り、溶着痕が残る。

1425はII-3～4段階の杯身破片である。

河川2は河川1に切られている。土層観察により、何回か流れた可能性がある。少なくとも大きな流れが2回あったものと思われる。下位には粘土からシルト質粘土が堆積している。規模は幅約7m以上、深さ1.4mを測る。出土遺物には須恵器があり、時期的には河川1とほぼ同時期で、II-2段階のものが見られる。他に簾状文のある弥生中期の壺体部片が1点、I型式かと思われる高杯脚片1点、混入と思われる瓦器腕の破片などがある。このほか、河川2出土の須恵器壺体部内面には擦圧痕を有するものが1点認められた。

1424はII-1～2段階の杯蓋1/3個体である。稜は僅かに突出し、口縁端部は内傾する。焼け歪みにより、天井部が下がり、外面には溶着痕が小さく3ヶ所にみられる。

河川3は1Aトレンチの南西に位置し、2A地区の北東隅に跨がって南北方向に走行している。幅約6～8m、深さ約1.8mを測る。出土遺物には須恵器・土師器があり、須恵器はII-2～4段階（1426）のものが多く、中にはII-5段階のものも見られる。他に、須恵器ではI-2や4段階の壺ないしは壺が数点、弥生土器では磨滅した頸部破片や、中期の底部破片がある。そのほか、混入と思われる中世の土釜や、風化の著しいサヌカイト？の礫が1点など確認できた。

1426はII-3～4段階の杯身破片である。1427はII-5～6段階の杯蓋細片である。受け部上面に僅かに灰を被る。

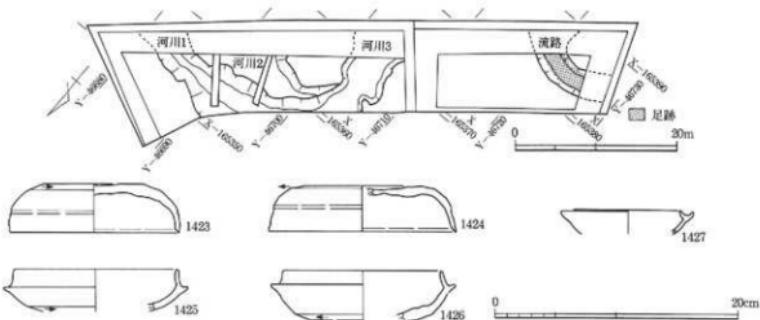


図167 1A・2A トレンチ河川1・2・3と流路平面図および出土遺物

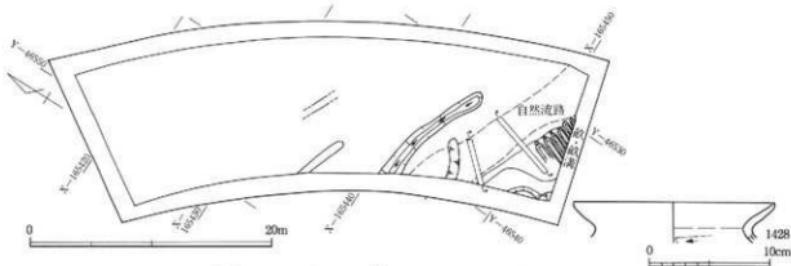


図168 2C トレンチ第6面平面図および出土遺物

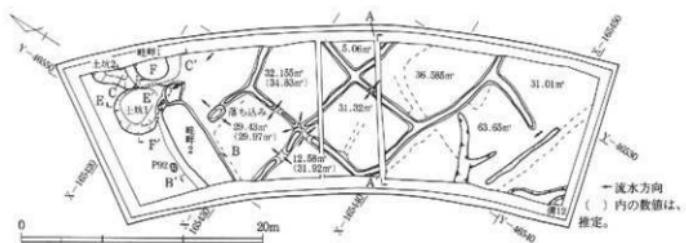


図169 2C トレンチ第5面平面図

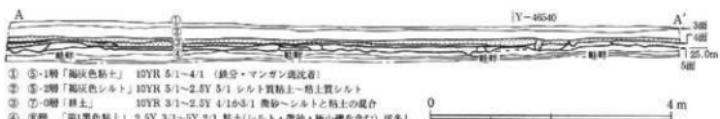


図170 2C トレンチ第5面断面図

## (2) 2A トレンチ (図167)

2A トレンチの路は、1A トレンチの河川 3 が形成される青灰色粘土層が、2A トレンチで暗灰色シルト質粘土層になり、この層で足跡とともに検出している。暗灰色シルト質粘土層は植物遺体を含む堆積層で、上面では鉄分が沈着している。

## (3) 2C トレンチ第 6 面 (図168)

第 6 面は第 5 面の水田面を形成している黒色粘土（第 2 黒色粘土）を除去した段階で、確認できる面である。基本層序では①-0 層から①-1 層の上面である。ちなみに①-0 ~ 1 層は全体的には砂疊（中砂～小砾）から粘砂質土で構成される。遺構は少ないが、特に調査区南半部に集中しており、溝、自然流路、畝・畝溝が存在する。

溝は 3 条検出した。1 条は自然流路の北側に近接して位置し、平面がやや弧を描くものの自然流路と主軸をほぼ同一方向におく。方向は南東～北西方向である。幅 0.5 ~ 1.9m、深さ 5 ~ 8 cm を測る。埋土は灰色粘土である。

他の 2 条は、先の溝の北側 4 ~ 7 m 離れて位置する。溝の主軸、規模、埋土は先の溝と同一である。

自然流路は畝・畝溝の北側に隣接しており、主軸は先述した溝と同一方向である。規模は幅 2.5 ~ 3.5 m、深さ約 0.7m を測る。

畝・畝溝は調査区の南端に位置し自然流路に隣接している。遺構が立地する所は全体的にやや低くなっている、地形的にも東から西へ除々に緩やかに傾斜している。溝は 6 条を確認し、溝と溝の間がやや高くなっている。溝は等間隔に掘られており、埋土は黒褐色砂質土（シルトとの混合土）で、炭化物を著しく含む層である。この層からは花粉分析でイネ花粉が検出されている。なおこの畝溝では、畝溝の先端に径約 0.3m の Pit が存在する。このような溝先端に Pit を有する遺構は、東大阪市・八尾市の池島・福万寺遺跡においても検出されている。

遺物は 6 面の直上層の第 2 黒色粘土中から少量出土している。それらは須恵器、弥生土器、土師器、サヌカイト剝片である。須恵器は I - 5 ~ II - 1 段階の杯身、杯蓋の細片が各 1 点と、内面すり消しの壺体部細片が 1 点、弥生土器は中期から後期の壺口縁部細片 1 点、後期の底部破片が 1 点、弥生後期～庄内式の手培形土器細片が 1 点、庄内～布留式の甕が 1 点 (1428) 出土している。

1428 は頸部内面に稜をもち、口縁端部は少し上方へつまみ上げられている。調整は表面が磨滅し不明瞭だが、内面は頸部稜より僅か下までヘラ削りがおよぶ。色調は灰白色である。胎土中に 2 mm 以下の石英、長石、チャートを含む。

## (4) 2C トレンチ第 5 面 (図169～175、写真図版118・128)

第 5 面は基準層とした⑥層の第 1 黒色粘土を除去した面で、暗灰色粘土をベースとしている。遺構としては大小の畦畔、溝、土坑（あるいは井戸）を確認している。地形的には北端が約 T.P. +24.6m、南端が T.P. +25.4m と約 0.8m ほど南側が高くなり、なおかつ西側がやや低くなっている。畦畔 1・2 の北側はその南側に比べて急に低くなっている、0.15 ~ 0.2m の比高差がある。

畦畔は 2 種類に大別できる。1 つは幅 3 ~ 4 m、高さ 0.3m を測るもの、もう 1 つは幅 0.5 ~ 1 m、高さ 0.1m である。前者は畦畔 1・2 で、後者を小畦畔と呼称した。

畦畔 1・2 は一部のみしか確認しておらず、大半が調査区外である。主軸を北東～南西方向におき、大きく 2 層の土で盛土を行っている。畦畔 1 と畦畔 2 の間は、畦畔の上端で 2.4m ほど大きく開口する。この開口部には畦畔 1・2 の崩れた土が堆積し、西側へ流れている様子が窺える。畦畔 2 の盛土を除去

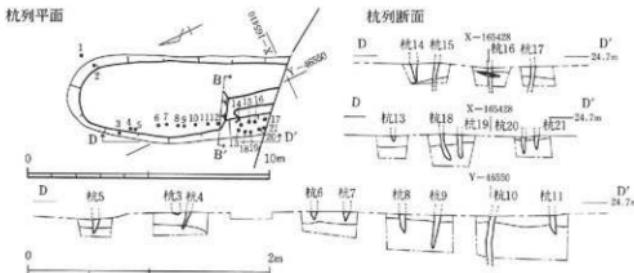


図171 2C トレンチ第5面畦畔2付近の杭列平・断面図

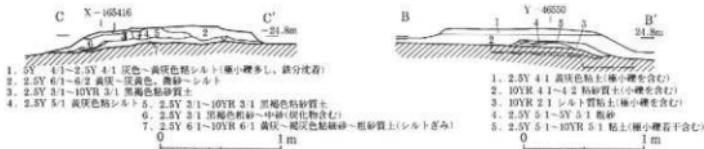


図172 2C トレンチ第5面畦畔1断面図

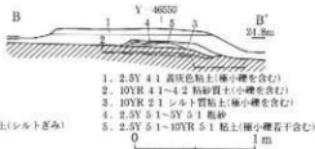


図173 2C トレンチ第5面畦畔2断面図

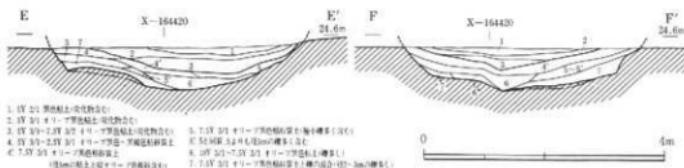


図174 2C トレンチ第5面土坑1断面図

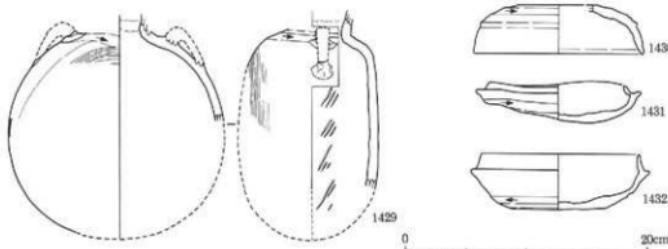


図175 2C トレンチ第5面出土遺物

すると、第2黒色粘土が確認できるが、この上面において杭列を確認している。杭列は調査時において古墳時代ではなく、弥生時代後期から布留式期の時期と考えたが、この時期の遺構が調査区の南半部に集中しており、北端部では皆無に等しいので、本杭列は畦畔2と有機的な関係があったものと推測される。

畦畔2付近からは図175-1430、1431の須恵器やサヌカイト剝片などが出土している。1430は⑧層と⑨層の境から出土のII-2段階の杯蓋である。稜部は退化して凹線が1条巡り、口縁端部は内傾したものが退化して沈線が1条巡る。外面に灰を被り、口縁部に焼け歪みがみられる。1/2個体残存する。1431は焼け歪みの著しいII-4段階の完形杯身である。底部外面に灰を被り、径 $6 \times 6.8$ cmの重ね焼きの痕跡を留める。

小畦畔の幅は、上端部が0.3~0.7m、下端部が0.5~1m、高さ約0.1mを測る。小畦畔は連続しているものと、途中カットして途切れるものがあり、途切れるものは恐らく水口として利用されたものと考えられる。畦畔の盛土は黄灰色~褐灰色・黒褐色粘土質シルト（微砂・極小礫含む）である。小畦畔は畦畔1・2の北側において検出できなかったものの、北端の断面観察において確認しているので、全く水田として利用されなかったとは言い難い。

なお、調査中、水田面に点線で図示した輪郭のものを確認した。平面を見るかぎり、畦畔と何ら違いはないが、断面観察では立ち上がりは見られなかったので、畦畔の土が崩れたものか、あるいは造り替えられたり、修復されたものと推測される。

水田面は有機質に富んだ黒色粘土（炭混じり）が堆積し、その上に耕作土と推測される土が堆積する。畦畔は基盤目状の方形に区画しており、一筆分の面積は（復元の面積もいれると）凡そ30m<sup>2</sup>前後である。

落ち込みは畦畔2と小畦畔との境に長方形のものが存在する。大きさは1.6×0.8m、深さは5~6cmである。土坑1・2と関連する遺構か。

杭列は畦畔2の西辺と開口部に近い東裾部で確認した。先ず西辺に沿う杭は19本あり、調査区外にもさらにのびており、主軸を北北東~南南西におく。杭の径は5~6cm、残存長は長いもので4cm程である。杭列の箇所にはシルト質粘土、粗砂、粘土の3種の土を盛り上げている。

溝12は南端の隅に位置し、4面で検出した溝12と同一である。溝12と近接して位置する溝は、非常に浅いものである。溝の主軸は小畦畔とほぼ同じ方向におく。

土坑は2基確認した。井戸の可能性も否定し難いが、ここでは一応土坑としておく。土坑は畦畔1と2の北西側、開口部に隣接している。

土坑1は畦畔2の流れた土を除去した段階で検出した。本遺構は不整な円形または隅円方形を呈し、開口部の箇所を意図的に削り出す。水田からの水や泥をこの箇所に溜めておく施設であろうか。大きさは径約4m、深さ0.7mを測る。埋土は上層より黒色粘土~オリーブ黒色粘土、オリーブ黒色粘土~黒褐色粘砂質土が粘土である。出土遺物としては須恵器杯身1点（図175-1432）と、用途不明の木片1点を検出したのみであった。1432はII-3~4段階の杯身である。口縁部は1/2欠損しており、少し歪んでいる。外面には一部軽く灰を被る。

土坑2は土坑1の北東側に隣接して位置する。規模は土層観察用アゼにかかり全容は不明であるが、推定の最大径が3.5m、深さ0.5~0.7mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、土坑1と同様に砂質土と粘土である。遺物は全く見い出せなかった。土坑1と同様の施設であろうか。

Pitは土坑1の西側約3m離れて位置する。規模は径0.5~0.7m、深さ0.1mを測る。

図175-1429は5面直上の⑧層（第1黒色粘土）出土の須恵器提瓶である。頸部から体部上半にかけて残存する。体部には一部にカキ目が残存する。把手は断面円形状のもので欠損しているが、その形状からII-3段階と思われる。

（5）2C トレンチ第4面（図176・177、写真図版118）

第4面は、第1黒色粘土の上面に形成された遺構面である。遺構としては溝、高まりがある。この面においては、下層第5面の畦畔1・2の上端面が検出される。第4面の高さは、南側がT.P.+25.45mで、北側がT.P.+24.6mを測る。地形は上層と同様に南側から北側へ低くなり、傾斜している。

溝は北端と南端で確認した。溝8・9・10は畦畔1・2に近接して位置する。溝8は畦畔1と2の北西側裾部に位置する。幅0.8~1.4m、深さ0.1~0.2mを測り、断面形は上方へやや開く「U」字形を呈する。北東から南西方向へ蛇行しながら流れる。溝9は畦畔1の北東裾部から北西端に向かって走行する。幅1~1.5m、深さ0.1~0.15mを測り、断面形は逆台形状を呈する。溝10は東から西へ走行し、溝9へ流れ込む。幅1m、深さ4~6cmを測る。溝8~10の埋土はいずれも（白）灰色粘土である。遺物は溝内から出土していないが、溝8・9の周辺部でII型式の須恵器が出土しており、耕作土の遺物と考えられる。

溝11~14は調査区の南半部に位置する。溝11は幅が0.8~1.2m、深さが0.28~0.36mを測り、北東から南西方向に走行する。埋土は灰色粘土と黒色粘土の2層である。溝14は溝11よりもやや幅が狭い。埋土は溝11と同様に灰色粘土が堆積している。溝12は調査区の南端の隅に位置し、大半が調査区外である。本溝の北東肩部に幅0.7~1m、高さ0.15~0.2mで、溝12と平行するようにして高まり状遺構があり、堤としての機能が推測される。なお本溝は第5面から繼續して流れる。

水田畦畔は第4面において、第5面の畦畔の上部（または上端面）が現われている。畦畔自体はこの面から立ち上がるのではなく、下層の第5面から立ち上がるものである。畦畔は方形に区画されて造られており、この時点では明瞭な6条の畦畔を確認した。これらの畦畔と類似する土が本遺構面で帯状に確認しているが、先の畦畔の様に第5面からは立ち上がってない。

第4面上は、基本層序の項で先述した⑦-0層と⑦-1層が堆積する。⑦-0層と⑦-1層は粘質土と微砂・シルトの混合土が堆積し、炭化物を含む明らかに人為的に攪拌された土で、耕作土である。⑦-0層もしくは⑦-1層の上面では他の遺構は見られず、土器のみが散在的に見られる。

図177-1433~1436は⑦-0層と⑦-1層出土須恵器である。1433はI-5~II-1段階の杯蓋で稜は明確に突出し、口縁端部内面に沈線が1条巡る。天井部外面のヘラ削りおよび内面のナデはやや粗雑で、内面には粘土紐の巻上げた痕跡が少しと、指押さえ？の痕跡が残る。器壁は厚い。ほぼ完形に近いが、口縁部が一部欠損している。外面には灰を被り、口縁部は僅かに焼け歪んでいる。

1434はI-5~II-1段階のほぼ完形の杯身である。立ち上がりは高く、口縁端部で内傾し、沈線が1条巡る。受け部は薄い。

1435はIII-2~3段階の平瓶である。口縁部と体部の一部が欠損した、焼きが少し不良で軟質のものである。底部外面は回転ヘラ削りにより平らである。体部中央には少し稜がみられる。底部外面に「-」のヘラ記号がある。

1436はIII-2~IV-1段階と思われる無高台の杯身である。口縁部が1/4弱、底部が3/4残存する。底部外面は回転ヘラ削りで、口縁部を下にして右回りである。

上記の他、第4面からはII-6段階かと思われる焼成不良の杯身受け部破片1点と、その他細片も極

少量出土している。

#### (6) 1C・2C トレンチ出土遺物 (図178、写真図版129)

1439は第1面出土の須恵器高杯脚部破片である。脚柱部のみ残存し、裾部は欠損している。脚据寄りには杏仁形の透かしが外面から内面に向かって四方に穿たれ、その直下には凸帯が1条巡る。外面には灰を被っている。I-3~4段階のものか。この他、第1面出土遺物では、中・近世遺物に混じって、弥生土器片や須恵器片、埴輪片等もみられる。

1C トレンチの第2および第1黒色粘土層から、II型式の須恵器が出土している。

第2黒色粘土層から出土した1437はII-1~2段階の杯身で、底部1/2と口縁部が少し残存する。底部外面は焼成の具合で灰色ないし暗灰色を呈する。その他、第2黒色粘土層からは壺体部細片1点も出土している。

第1黒色粘土層から出土した1438はII-3~4段階の杯身で、口縁部から体部にかけて約1/4弱残存する。他に、第1黒色粘土層からはII-1の杯蓋1点、II-4段階の杯身細片1点、壺体部細片、II型式の蓋杯細片3点などが出土している。

#### (7) 2C トレンチ第3面 (図179、写真図版124)

第3面の遺構としては、Pit(杭列)、溝、流路等がある。Pitは調査区北端の流路付近に多く、南端では自然流路が存在する。南端自然流路からはII-6段階の杯身細片が1点出土している。

Pitは大きく2群に分かれる。A群は54~65であり、B群では66~81である。Pitの径はA群が0.15~0.2mで、B群は0.2~0.4mである。A群は北端に位置し、一部に杭が残存する杭列である。杭の主軸は、北東~南西方向におく。この杭列の西側に近接して更に小さい杭の痕跡が見られる。埋土は54~60が7.5Y5/1灰色粘土で、61~65は5Y5/1灰色粘土である。深さはいずれも5~6cmである。

B群はA群と約4~6m離れて南側に位置する。A群の杭列と平行するかの様にして位置し、北東~南西方向に主軸をおいている。B群に接して溝が存在するが、Pitは溝を切っているので、溝よりも新しい時期である。Pitの埋土は10YR6/1~5/1褐色か、2.5Y6/1~5/1黄灰色の粘土質シルトかシルト質粘土である。A群と異なる点は、埋土に緑黒色粘土粒が混入している事である。これらのPit群と離れて、調査区南半部の流路付近にPitが数基存在している。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色シルト~5Y5/2灰オーブ色粘土である。

溝は3条存在する。1条は杭列B群(溝1)で、もう2条は調査区の南半部(溝2・3)に位置する。溝1は幅0.6~0.7m、深さ約3cmを測る。埋土は白灰色粘土で、北東から南西へ流れている。溝2は調査区南端部の高い所に位置する自然河川である。検出長は1.5mであるが、他は調査区外へのびている。主軸は北西~南東方向におき、推定幅約4~4.7m、深さ約0.8mを測る。埋土は砂質土と砂礫である。この溝の洪水で、調査区の南端は砂で覆われる。

溝3は自然流路である。溝2とは約5m離れて位置する。溝は平面形がY字状を呈し、西端で1本になっていたのが、2股状に分かれる。幅は1.3~3.3m、深さ0.12~0.15mを測る。溝1と同様に北東から南西方向に流れる。埋土はにぶい黄色砂が堆積している。

なお、溝3のすぐ南側は3面と4面の間にもう1面確認できる。この面を3-1面とする。この面には薄い砂の層が確認でき、その砂層を除去すると、一部に足跡が検出される。

#### (8) 3C トレンチ (図180、写真図版129)

3C トレンチからは1440~1447の須恵器が出土している。これらの遺物を検出した遺構は第5面堤2

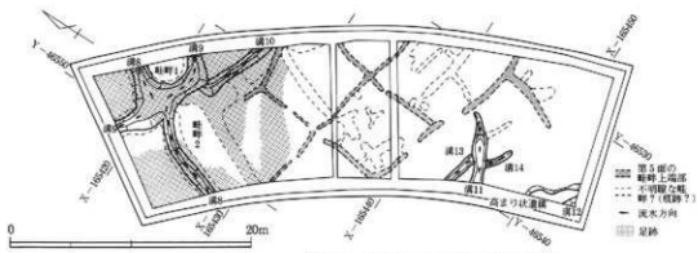


図176 2Cトレンチ第4面平面図

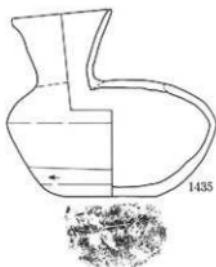


図177 2Cトレンチ第4面出土遺物

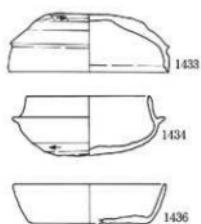


図178 1C・2Cトレンチ出土遺物

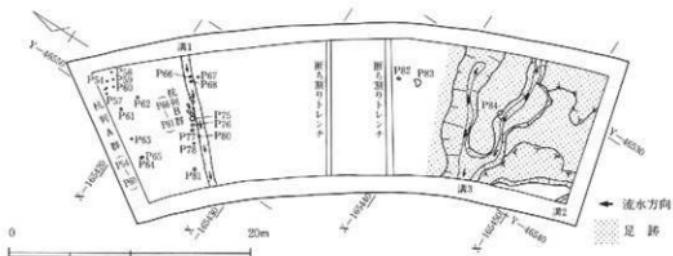


図179 2Cトレンチ第3面平面図

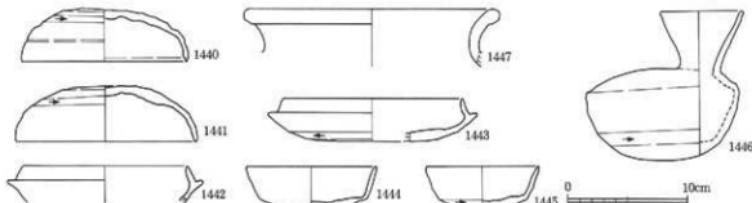


図180 3Cトレンチ出土遺物

下層の土坑23（1440）、第3面堤2（1441）、第2面溝23（1442）、堤2上面（1447）、堤2東裾部の溝26（大溝）（1443）、堤2盛土中（1444～1446）である。

1440はII-2段階の杯蓋である。口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形である。稜部には退化した沈線が1条巡る。内傾した口縁端部には沈線が1条巡る。胎土中に8.5mm内の粗いチャート礫を幾つか含む。

1441はII-2～3段階の杯蓋である。口縁部が3/4強欠損し、焼け歪みがある。稜部は退化し、痕跡的に僅かに角ばっている。

1442はII-3～4段階の杯身である。口縁部から受け部下までが約1/4残存する。

1443はII-3～4段階の杯身で、全体の約1/3が残存する。この杯身は焼け歪んでおり、表面全体がローリングを受けた様に磨滅している。

1444はIII-1～2段階のほぼ完形の杯身と思われるものである。内面ほぼ全面と外面口縁部の一部に灰を被り、口縁部は椭円形に焼け歪んでいる。底部外面は回転ヘラ切り後、難に不特定方向になでている。II-6段階の杯蓋の可能性も考えられる。

1445はIII-1～2段階の杯身と思われるものである。口縁部から底部にかけて1/6残存する。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。

1446はII-6～III-3段階かと思われる小形の平瓶である。底部は丸みを帯び、体部の稜は明確である。口縁部は中央よりかなりずれた位置に付けられている。口縁部内面、体部上半外面に自然釉を被った完形品で、口縁部に焼け歪みがみられる。

1447はII-3～4段階と思われる壺である。口縁部1/4が残存し、焼成は悪く軟質である。

## 2. D地区の遺構および出土遺物（図181）

Dトレンチの遺構としては、古墳3基（1基は推定）、土墳墓、土坑、落ち込みを確認した。先述した様に、本時代の遺構は丘陵を大きく削平して造成され、更にみかんの木を植樹された為に、大半が消失している。2基の古墳の盛土は全く消失し、2号墳のみが辛うじて墳形を留めていた。1号墳は主体部の一部、3号墳は墳丘裾部の出土遺物から古墳であったことが推測される。

### （1）Pit8（図182）

Pitは土坑18の南東側に隣接して位置する。平面形は不整な円形を、断面形はすり鉢状を呈している。大きさは径0.75～0.8m、深さは30～37cmを測る。埋土はにぶい黄色～明黄褐色粘砂質土と、にぶい黄色砂質土（若干粘性あり、礫を含む）の2層が確認できる。土坑18の埋土とはほぼ同質である。遺物は、埋土の上位から土師器と埴輪の破片が出土し、また下位からは須恵器の壺と壺の破片が出土している。本遺構は土坑18と近接し、しかも土坑18の頭部の位置に当たる事から、土坑18とは密接に関係があったものと推測される。

### （2）その他のPit

Pit8と先述した弥生時代のPit9以外に、Pitとして登録しているものは53基ある。このうち遺物が出土している遺構は、先の2基と中世の遺物が出土しているPitの3基である。他のPitは全く遺物を検出していない。Pitの全体的な特徴は、丘陵の裾部において見られ、特に2号墳の西側の溝3の肩部と、3号墳の西側の溝6の肩部で見られることである。

### （3）落ち込み5（図183、写真図版119・130）

落ち込み5は、土坑18の西側へ約10m、また土坑12とも約12m離れている。落ち込みはT.P.+33.9～34mに位置しており、主軸を北東～南西方向におく。平面形は不整な長方形（小判形）を呈している。

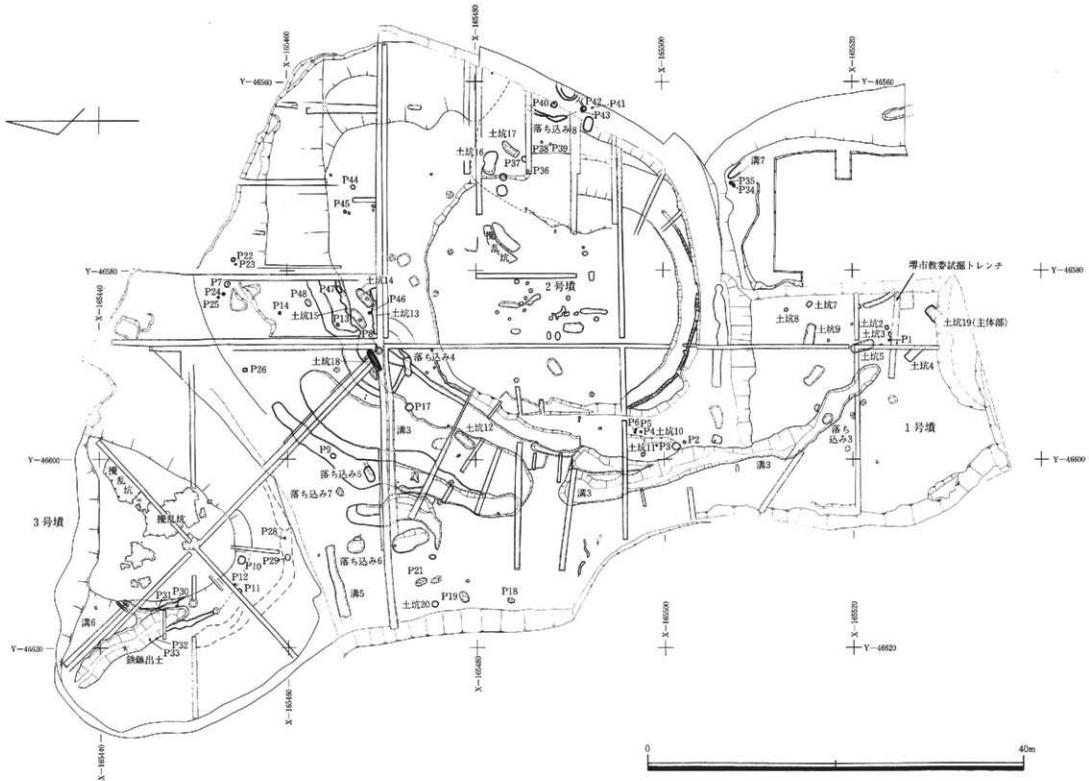


図181 Dトレンチ遺構全体図

大きさは全長1.7m、幅0.8~0.95m、深さ0.6~15cmを測る。埋土はオリーブ色の砂質土である。

出土遺物としては図183~1448・1449の古式土師器のほか、手焙形土器の破片と思われる土器が1点ある。1448・1449は南側の壁際で確認した。1448は杯部が欠損しているものの、杯部が上方に向いた状態で出土した。1449は脚部のみであるが、壁に沿うようにし、あたかも立てられているかの様にして出土した。本遺構は、土器の出土状況より土壙墓と考えられる。

1448・1449は布留式の前半に属する土師器高杯である(註-1)。1448は半球状の杯部に、低くハの字状に大きく開く脚部をもつ。脚部には3ヵ所に径8mmの円形の透かしが穿たれている。脚柱部底面には径3mmの細い穴がみられ、脚柱部を絞り込んで作ったと思われる。調整は杯部外内に一部横ないし斜め方向のヘラ磨きが残る。調整は脚部外面は斜め方向のハケ目の中斜めないし横方向のヘラ磨き、脚部内面は横方向のハケ目の中一部ヘラ磨きがみられる。胎土中には5mm以下のチャート、石英、長石を少々含む。色調はにぶい橙色である。

1449は1448よりも脚裾径が少し小さいが、殆ど同じ作りである。杯部は欠損して不明であるが、脚部には3ヵ所に径8mmの円形の透かしが穿たれている。脚柱部底面には1448同様、径3mmの細い穴がみられる。調整は斜め方向のハケ目の中斜めないし横方向のヘラ磨き、内面は斜め方向のハケ目の中一部ヘラ磨きが施されている。胎土中には7mm以下のチャート、長石、石英を少々含む。色調はにぶい橙色である。

#### (4) 落ち込み4とその他の落ち込み(図184)

落ち込み4は土坑18の南側へ約2.5m離れて位置し、標高T.P.+36m付近に所在する。主軸方向と規模もほぼ同じである。平面形は不整な長方形を呈し、大きさは全長2.1m、幅0.75~0.84m、深さ13~15cmを測る。遺物は須恵器と埴輪の破片が若干出土している。

その他の落ち込みとしては、遺物の出土を見ない時期不詳のものがあり、出土しても必ずしも時期を確定出来ないものもある。ここに2基の例を挙げるのもそういった例であるが、古墳時代遺物が若干認められ、他の遺構と形状を異にするので記述しておく。落ち込み6は、落ち込み5の西北西約6m離れて位置する。平面形は不整な円形を呈する。大きさは径が1.4~1.8m、深さ約30cmを測る。埋土は灰オリーブ色砂質土である。出土遺物としては、須恵器杯蓋と埴輪の破片がある。

落ち込み7は落ち込み5の北西方向約2m離れて位置している。平面形は不整な円形を成し、径0.65~0.92m、深さ約30cmを測る。遺物は土師器と埴輪の破片が出土している。埋土は粘性のある灰オリーブ色砂質土である。

#### (5) 3号墳(図184・186、写真図版123・130)

3号墳は2号墳の北西約25m(古墳の中心から中心まで約50mを測る)に位置する。墳頂部の高さはT.P.+34.6mを測り、丘陵の先端部分に位置している。

本古墳は後世の削平・破壊・地形変更が著しい。特に中・近世、さらに現代の果樹開墾によって、墳形は盛土・主体部、外部施設等は全く留めておらず、現状を見るかぎり古墳としての要素は少ない。しかし以下の4点において古墳としての可能性を考えたい。

①1940・60年代に伏尾集落を中心として撮影された航空写真を見ると、丘陵先端部に高まりが認められる。

②2号墳との間に、丘陵を明確に切断していること。

③本古墳の西側斜面に存在する溝6より、方頭廣根斧箭式鉄鎌が出土していること。

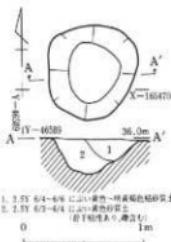
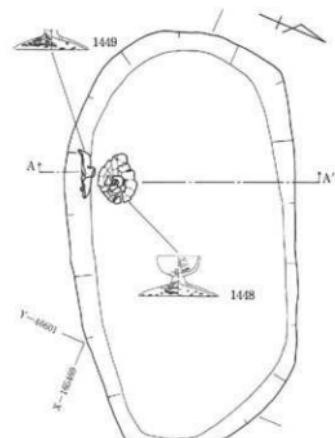


図182 D トレンチPit 8 平・断面図

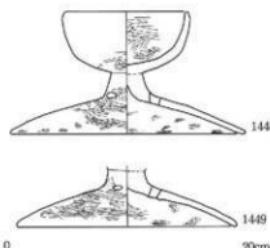
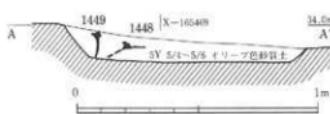


図183 D トレンチ落ち込み 5 平・断面図および出土遺物



図184 D トレンチ 3号墳・その他の遺構平面図および3号墳出土遺物

④僅かではあるが、本古墳の裾部で埴輪片や須恵器片が確認されたこと。

出土遺物としては、鉄鎌（1450）1点のみあげられる。本遺物は溝6の上部の黄褐色砂質土より、瓦器、土師器小皿とともに出土した。また、他には釘も出土しているが、中世の遺物と思われる。

鉄鎌は有基の廣根式（平根式）である。全長8.2cm、鎌身幅2.7cm、鎌身の厚さ0.25cmを測る。鎌身幅の最大幅は刃部におき、平面形は梯形な方形形状を呈している。鉄鎌の鎌身と基は明瞭に分かれ、関の所で算盤玉状に厚みを持つ。茎長は2cm、厚さは約0.8cm、幅0.7~0.4cmを測る。

上記の他、3号墳の墳頂部の表土を除去して、II-4~5段階の須恵器杯身細片が1点（1454）出土しており、その外面は灰を被っている。また、3号墳の墳丘南側裾部の表土を除去して、II-3~4段階の杯蓋破片が1点（1455）出土している。1455は棱部付近までヘラ削りが及んでおり、天井部外面に3本の平行するヘラ記号が見られる。

#### （6）土壙墓と土坑

土壙墓または土坑と考えられる遺構は、10基存在する。そのうち土壙墓として確実なのは1基で、土坑18である。土坑18や1号墳の主体部（土坑19）は発掘当初、単なる土坑と考え、土坑として遺構番号を付した。遺構の名称としては登録した当時のままで、変えることをせざり呼称する。土坑18周辺の土坑も、おそらく土壙墓であったものと推測されるが、土坑のなかで記述する。

また落ち込み5の様に遺構として浅いものもあり、土器の出土状況より土壙墓としての可能性は高いが、ここでは一応落ち込みの中で記述する。

#### 土坑18（図184・185、写真図版119・130）

土壙墓である。土壙は、2号墳の北西の裾部の傾斜変換点に位置し、2号墳とは約9m離れている。平面形は、隅円長方形を呈しており、主軸はおおむね北東-南西方向のN-61.5°-Eの方向に置き、標高T.P.+35.3~35.7mに位置する。地形的には2号墳の埴輪列が検出された所から除々に傾斜しつつ低くなり、E6h 8・9区において古墳の墳丘裾部に至る。そしてE6h 7・8・9区からE6g 7・8・9区にかけて遺構面はテラス状に平坦にカットされ、さらに3号墳へ向かって急激な斜面となる。本土壙はテラスのすぐ下に位置し、北東の小口部と南西の小口の高さを比較すると、平均約20~24cmの差があり、また側面では約12~15cmの差がある。

土壙は全長2.47m、幅0.64~0.67m、深さ0.315~0.472mを測り、段状に掘り窪められている。段状に掘り窪められた所は、全長2.075m、幅0.27~0.42m、深さ0.09~0.17mを測る。木棺の痕跡は確認出来なかつたが、足元と考えられる南西の小口部が北東小口部に比べて27cmと幅狭があるので木棺の存在が推測される。土壙の底面は丸く成し、3~8cm程若干窪む事を確認した。この窪んだ箇所は地山（遺構形成層）の土とほとんど大差なく、一見すると不明瞭な土である。この部分が木棺の底部の痕跡と思われる。埋土は大きく5層に分けられ、上層より1. にぶい黄色~明黄褐色砂質土、2. 明黄褐色~にぶい黄色粘砂質土（やや細砂質）、3. にぶい黄橙色が明黄褐色粘砂質土（小疊含む）・灰黄色砂質土（小疊含む）、4. にぶい黄色砂質土、5. 黄褐色砂質土（ややしまりがある）である。

出土遺物としては鉄剣1点のみあり、北西端の一段下がった段状部分より検出した。鋒は南西方向に、茎を北東方向においている。なお頭部の位置は、鉄剣の置かれた付近と推測される。

鉄剣はやや腐食が見られるものの、全体的に残存状況は良好である。鋒の部分は欠損しているが、茎は明瞭に作り出されている。残存長は46.6cmを測り、本来の全長は、47cmから47.5cmはあったものと推測される。剣身の断面形は全体的にレンズ状を呈するが、鋒付近ではレンズ状というよりも菱形に近い

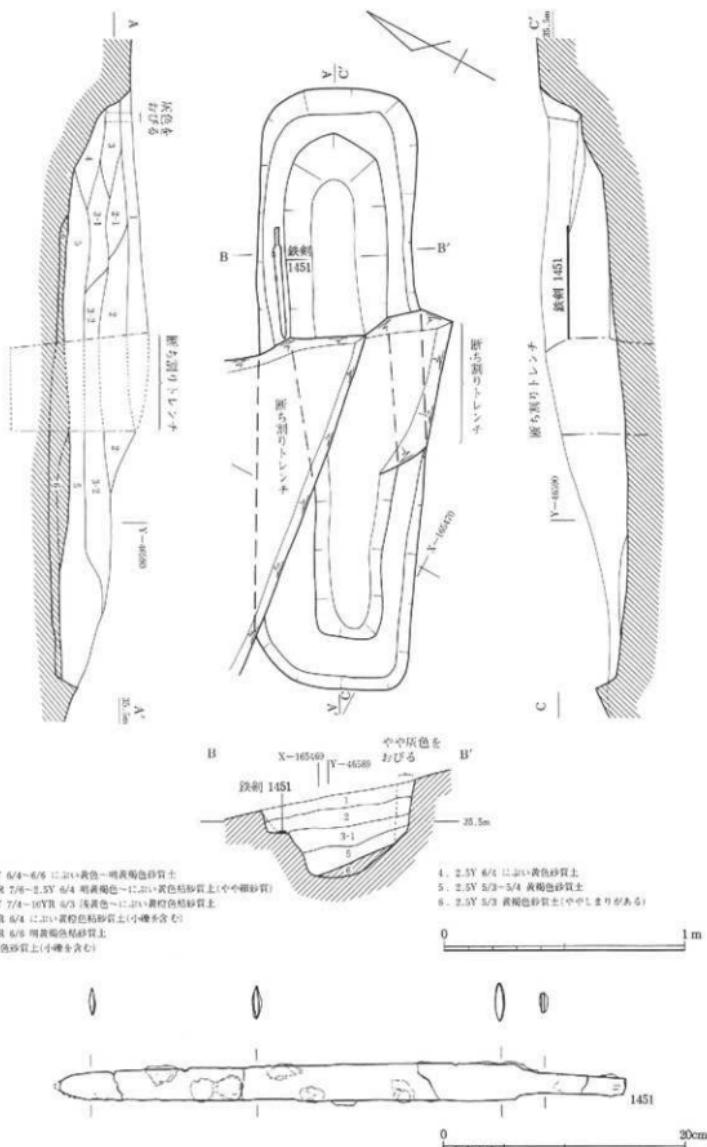


図185 Dトレンチ土壙墓（土坑18）平・断面図および出土遺物

形状である。鎬は不明瞭である。最大身幅は3.1cmを測り、最大身厚0.65cmを測る。茎は身に対して短く、断面形は長方形を呈する。茎長は7.3~9cm、茎幅1.7cm、茎厚0.3cmを測る。関は直角に作り出されず、剣身から茎へ緩やかに至る。関の部分は対称ではなく、一方は小さく、もう一方は不明瞭であるが、大きく弧を描く様に作り出す。関の幅は3cmを測る。鉄剣はX線で観察した限り象嵌や文字は見られず、また茎の部分も目釘孔は見られなかった。

#### (7) その他の土坑（図186）

先述した土坑以外に登録した土坑は16基数えられる。その内、土坑18と同規模の土坑は9基存在する。以下、簡単にその概要を記す。1号墳においては土坑は4・5・9の3基が存在する。本遺構は以下の2点において土壇墓と区別した。つまり、1. 近接する主体部の土坑19の埋土とは異なり、橙色から明黄褐色の粘質土に上層の腐植土が多く混入している土である。2. 主体部の土坑19は土壇墓の土坑18とはほぼ同じ主軸方向をおくのに対して、3基の土坑は主軸が異なっている。

土坑18の周辺においても、土坑12・13・14・15の4基の土坑を確認した。このうち土坑12は、土坑18より離れて位置している。これらの中で土壇墓と考えられるのは、12・14・15である。

土坑14・15の主軸は、土坑18の主軸よりもやや西へ振るもの北東—南西方向に主軸をおく。規模もほぼ同じである。埋土から見れば、みかんの植樹開闢によって破壊され、腐植土が混入しているが、土坑18の埋土と同質の土も確認しているので土壇墓であった可能性が高いと思われる。また遺物においても、破片ながら埴輪と須恵器も確認している。

土坑12は、土坑18の南西方向に約10.3m離れて位置する。主軸は北東—南西方向におくものの、土坑18の主軸よりも若干西に振っており、土坑15とはほぼ同一方向である。また落ち込み5とも同じである。土坑は、2号墳の裾部に走行する溝3の続きの溝の肩部に位置しており、大きさは全長2.47m、幅0.84~1m、深さ約0.4mを測る。埋土は褐色を帯びる砂質土である。土坑内では遺物の出土は全く見ないが、土坑の直上で須恵器2点（図186-1452、1453、写真図版119）と不明鉄器片1点が出土している。

1452は直口壺の頸部から体部にかけての破片である。頸部には凸帯3条と櫛描波状文が3帯（6mm幅の6条1帯）残る。頸部内面と肩部外面に灰を被っている。1453は腰の体部から底部にかけての破片である。体部中央に1ヶ所円孔を有する。底部外面は不特定方向のヘラ削りの後、一方向になでている。底部内面は小さい當て具痕が不明の窪みがあり、その後、なでている。底部には1ヶ所、焼き膨れがみられる。円孔部分周辺の外面に灰を被っている。

土坑16・17の2基は、土坑18を中心とした土坑群とは南東へ約20m離れて位置する。土坑16の主軸は、土坑9と同一方向で、また土坑17の主軸は土坑14・15とはほぼ同一方向である。土坑16の埋土は、上層の擾乱土が混入し、土坑17では土坑18の埋土と酷似している。

#### (8) 1号墳（図187・188、写真図版120・130）

1号墳は2号墳の南側に約5m離れて位置する。古墳は主体部のみ確認し、盛土は削平されて全くなく、墳丘の規模、墳形、外部施設等は不明であった。

主体部（土坑19）はトレンチの南端部に位置する。主体部の大半は破壊されているが、頭部に当たると思われる箇所を確認した。主体部は主軸を北東—南西方向（N-50°-E）に置く木棺直葬である。掘り方残存長は約1.9m、幅約1.15~1.25m、深さ約0.07~0.08mを測る。上部は削平された為に、深さは浅くなっている。

木棺は痕跡のみを確認したが、大きさは残存長が1.135mを測り、幅約0.74m、深さ約0.08mを測る。

木棺の構造は不明であるが、土層観察により、木棺の小口部が外方へ傾斜している点から、組み合わせ式ではないと考える。木棺の厚みは9cmから10cmを測る。遺物としては、木棺内部の底に赤色顔料が若干残り（厚さ3.5cmほど）、北西端より柳葉式の鉄鎌1点を検出した。鉄鎌は木棺主軸よりやや東へ振っており、鋒（切先）を東北東方向に向いている。なお、朱の分析では鉄鎌以外にも他の鉄製品が推測される。

出土遺物には鉄鎌、赤色顔料がある。鉄鎌は柳葉式である。図188-1456は鋒を除去した後に保存処

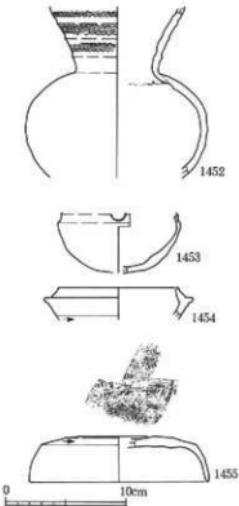


図186 Dトレンチ土坑12直上層他出土遺物



図187 Dトレンチ1号坑主体部(土坑19)位置図

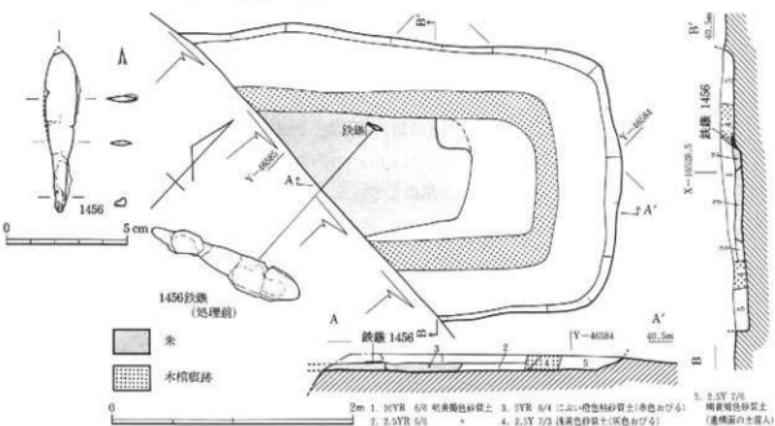


図188 Dトレンチ1号坑主体部(土坑19)平・断面図および出土遺物

理したものを掲載した。鐵鎌は鋒が若干破損しているものの原形を留めており、全長は6.6cmを測り、推定ではあるが6.8~7cmはあったものと思われる。鎌身長は4.4cm、鎌身幅は最大で1.4cm、厚さは0.25cmを測る。茎長は2.2cm、幅0.4~0.6cm、厚さ0.3~0.4cmを測る。断面形は、鎌身に鎌が辛うじて認められるので菱形を呈し、茎は方形を呈している。

赤色顔料については分析の結果、水銀朱と判明した。その結果報告は付章第6節に掲載した。

(9) 2号墳（図189~196、写真図版121~123・130~132）

1・2Dトレーナーにおいて推定直径約32m（埴輪列直径26m）の円墳である2号墳が検出されている。前述したように以前より埴輪の散布がみられ、「小代古墳群」として認識されていた地域である。近年にみかん山として大きく削平を受けており、2号墳は南側において埴輪列が約1/4周検出されたのみであり、墳丘部の埋葬関連の遺構等は確認されなかった。

墳丘残存最頂部は検出された埴輪列の北側約3mの地点であり、約T.P.+38.9mを測る。北方に向かって傾斜し、平らに削平を受けており、樹木の攪乱が多数みられる。純粋な包含層はなく、現表土が約5~10cm存在し、その下層に灰白色~明黄褐色の地山がみられる。

裾部は南側では1号墳との間において地山を大きく掘削しており、1号墳と周溝を共有していたものと考えられる。また、この切り通しは今まで農道として利用され、両側を削り落とされているようである。そのため、埴輪31~45は埴輪間際に削平を受けており、埴輪38・41は表土掘削以前からその一部が露出していた状況である。このような削平を受けていたが、墳丘裾最下部の痕跡が埴輪19~35の間で埴輪列から南へ1.2~2.4mの地点で検出された。この切り通し部分には約5cmの耕土とその下層に約20cmの地山流土の堆積土があり、埴輪の細片が多量に出土している。また、埴輪列の位置する幅約3.0mのテラスも確認された。

東斜面は大きく削平を受けており、埴輪列、墳丘裾は検出されていない。図189~8~19層は2号墳築造以前の堆積土であり、9層は2号墳築造以前の表土と考えられる。8および14層の上層の1層はみかん山造成時の流土である。13層の落ち込みは樹木の根によるものと考えられる。

西斜面は表土とみかん山造成時の流土である明黄褐色粘質土（1層）が堆積し、その下層が地山となる。流土堆積以前に大きく削平を受けていると考えられ、斜面中央部に中世に属する溝3が検出されている。

北側は前述したように墳頂部が北側に向かって削平を受けており、埴輪列は検出されていない。但し裾部と考えられる高さ30cm前後の段差が円弧を描いて約1/4周検出されている。また、丘陵は北東方向に延びており、先端部の3号墳との間には現比高差約4mの切り通しがある。

以上の状況から墳丘の築造は南北両側の地山を掘削し、墳丘部に盛土を行ったと考えられる。今回検出された埴輪列のうち埴輪2~41付近のテラス部は地山が露出しているが、これより東側のテラス部および裾部には盛土が施されていたと考えられる。

埴輪は墳丘南側において43本が樹立した状況で検出された。いずれも円筒埴輪であるが、朝顔形埴輪、形象埴輪の破片も若干出土している。また細片は墳丘周辺部からも出土しており、特に、1号墳との切り通し部分と埴輪2~13付近のテラス内側において散乱した状況がみられた。テラス内側の細片群には埴輪口縁部の破片をみることができ、埴輪が内側へ崩壊していることが推定される。

埴輪列は幅約3mのテラス上面中央部、テラス内側から約1.5mに位置している。埴輪間の心心間隔は36~47cmの範囲であり、平均41cmを測り、40cm前後のものが大部分を占める。そして、埴輪列は数本

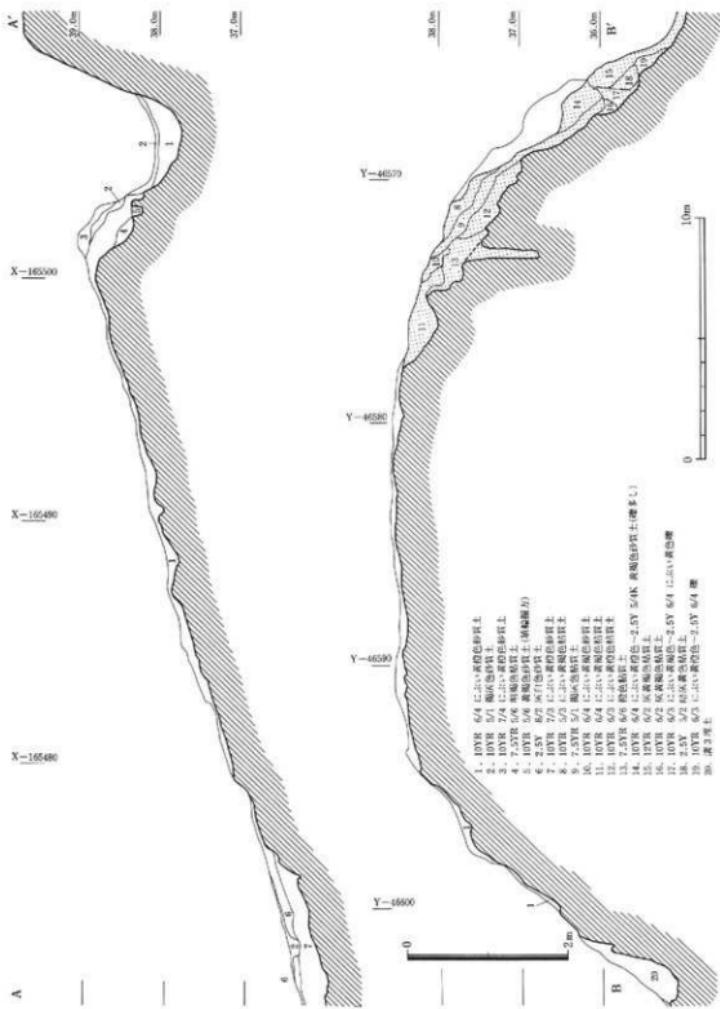


図189 Dトレンチ2号墳断面図

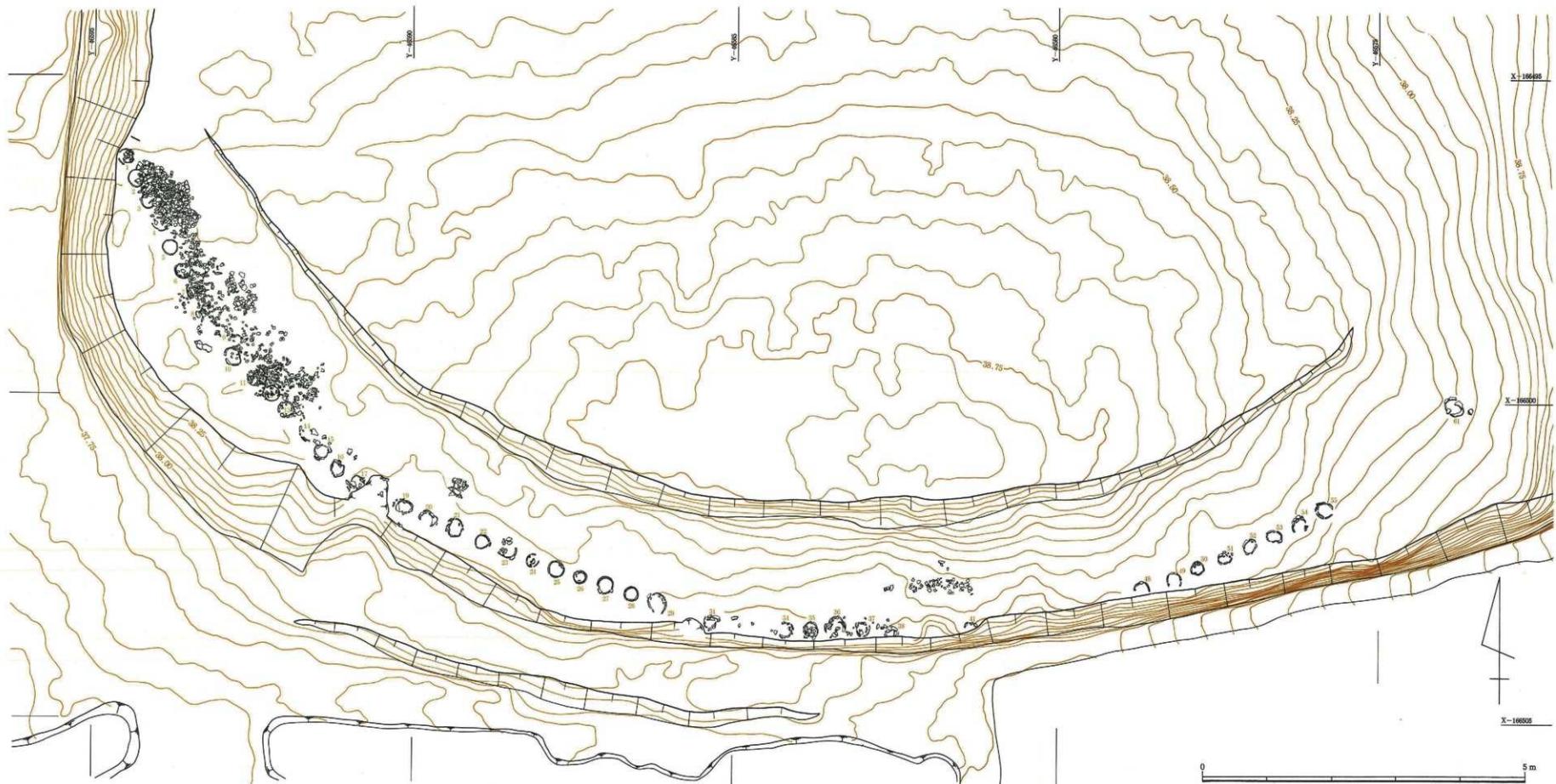


図190 Dトレンチ2号墳埴輪出土状況